稀書復製
第一編
稀書解說

15
394

始

稀書複製
會刊行

稀書解說

第一編

15
394

稀書解說小引

書籍の運命も亦轉變極り無きものなり。其最も薄倖數奇なるは刊本と雖も頻に水火刑兵の厄に遭ひて其形迹を留めざるものあり。況や稿本にして多く傳寫を經ざるものに至りては、只一たび世に生れ出でしのみ未だ其名をだに知られざるに倏ち埋沒の運を見る。信に憫むべきなり。

抑も一部の書籍は一箇の功業にして一箇の功業は一部の書籍なりとは西哲の謂ふ所なり。蓋し功業には大小種々あり。瑣々たる一小冊の如きは小功業の一に屬すること論莫けれど、而も其著者を以てすれば是れ心血の結晶に外ならず。縱令一時遊戯の文字と雖も、其之を出せる所以を討ぬれば、或は作者胸裡に理由あり、或は外界よりの要求あるを見る。況や眞摯なる述作に於てをや。若し單だ書籍につきて其

大正 9. 7. 4 内交

文字の上に見る外に更に何物かを獲んとせば、書籍と著者の心術又は社會の情勢とを對照考量せざるべからず。所謂眼光紙背に透る底の讀法卽ち是なり。凡そ讀書の士此法に依らば、天下に無用の書なく、求書愈〻博くして所得愈〻多からん。是に於て世間罕覯の書を尋ねて容易に接し難き珍味を賞せんとするの希望起る。而してかの薄倖の書再び世に出でて其所藏者の愛重保護に酬ゆるの機を得。

我儕仍て世間流布の稀なる書籍を宏量なる藏書家の祕笈に訪搜し、其書相版式を毫釐も變へず成るべく眞粹を傳ふるの主旨にて既に古書の複製三十七種に及びしに、幸に好書諸士の深厚なる同情を鍾め得、今や方に其第一期を終へて次で第二期に入らんとせり。是に於て既刊各書につきて一々詳細なる解說を作り之を輯めて一冊子とし、以て本會々員諸君の淸覽に供せんとす。但編者の見聞限あるに反し採擇圖書の範圍甚だ廣きが爲に、解說に多少の遺漏錯誤無きを保せず。偏に

博雅の垂敎を待つ。

大正九年六月

稀書複製會

同人

稀書複製會刊行

稀書解說

例言

一、本編は、稀書複製會に於て其創設以來二年間に複製したる稀覯の圖書三十七種に就きて解說せるものなり。

一、圖書の排列順序は、先づ刊本と寫本との兩部を別ち、更に各部の下に於て略ゝ類に依りて別ちたれども、强て煩瑣なる部門を設けず、同種類のもの二種以上あるときは其年代の先後に據ることゝせり。

一、稀書複製會は大正七年の夏、市島謙吉、和田萬吉、坪内雄藏、内田貢、安田善之助の諸氏と謀りて創立せるものにて、爾後直に事業に着手し、今日までの滿二年間を第一期として、複製の圖書三百部を限り、同好の會員に頒ちたり。本編の末尾に同會設立の趣意書を附錄して本編を繙かるゝ人々の參考に便ず。

一、此機會に於て本會の趣旨を贊し祕藏の圖書を本會に貸附して複製の自由を與へられたる藏書家各位に對し甚深なる感謝の意を表す。

目次

刊本之部

犬百人一首　狂歌繪本、寛文九年……頁九
江戸名所百人一首　近藤清春畫作、元文……一〇
狂歌繪本大津みやげ　かつぢ摺彩色本、安永九年……一一
萬歲躍　文南流踊くどき、萬治三年……一三
たかだち　丹緣五段本、寛永二年……一四
亂曲揃　宇治加賀掾正本、天和元年……一八
仙人龍王威勢諍　虎屋永閑正本、寛文十一年……二〇
文七一周忌　山本飛騨掾正本、元祿十六年……二一
曾我扇八景　竹本筑後掾正本、寶永三年……二三
風流謠年代記　寶暦七年……二四

古今今樣舞曲扇林　河原崎權之助著……二五
剝野老　役者評判記、寛文二年……二七
難波立聞昔語　役者評判記、貞享三年……二八
傾城王昭君　繪入狂言本、元祿十四年……二九
けいせい筑波山　繪入狂言本、享保十年……三〇
花相撲源氏張膽　芝居繪草紙、安永四年……三二
親船太平記　同上……三三
菊慈童酒宴岩屈　同上……三三
日下開山名人ぞろへ　小形赤本、元祿？……三六
桃太郎　赤本、享保？……三七
新板なぞづくし　黑本、寶暦？……三八
稗史億說年代記　黃表紙、享和二年……四〇
當世風俗通　洒落本、安永二年……四〇

後編女風俗通　同上……四一
人遠茶懸物　洒落本、天明六年……四一
吉原大雜書　遊女評判記、延寶三年……四三
筑波山戀明書並名所　貞享四年……四五
餘景作り庭の圖　菱川師宣畫、延寶八年……四七

自筆本之部

陪駕日記　附竹田手簡　田能村竹田……五〇
游相日記　渡邊華山……五一
繫升三升繫　櫻川吐芳……五三
呑込多靈寶緣記　山東京傳……五四
腹之內戲作種本　式亭三馬……五五
偐紫田舍源氏　柳亭種彥……五六

目次

里見八犬傳　曲亭馬琴……五九
歌舞伎十八番の圖　着色……六〇
武江扁額集　齊藤月岑……六三

附錄

稀書複製會趣旨……六五

稀書複製會刊行

稀書解說

刊本之部

狂歌繪本　犬百人一首　一册

本書は寛文九年の奥書ある狂歌繪本なり。然るに此奥書の「寛文九己酉歳」と「中夏上旬」の四文字とは書體を異にせるが如し。林若樹氏の說には前六文字は後に入木したるにあらざる歟、圖中の風俗より推すも寛文以前の開板と思はるると謂はれたり。跋文に幽双庵の署名あるは此書の著者なるべけれど、俗稱經歷明かならず、或は當代の狂歌者流ならんか。

內容は小倉百人一首を綴り、之に其頃の風俗畫を配したるものなり。跋文に「爰に賀近山庄の句を狂詠に飜轉して笑のたねをまく」とあるにても知り得べし。繪畫も亦當時の浮世草子等のそれに異らず、著名畫家の筆と見るべき所なしと雖も、其時代の風俗を其儘に描寫したるもの、如く、例せば十一張裏「本屋安賣」の圖に、庵形の看板に「源氏抄入銀」の文字あり、此頃の新刊を發行するに當り、出銀して彫刻出版の費を助けし事實を證明するものなり。かたゞ〳〵當代の職人盡とも見らるべく、現代より觀れば風俗史上頗る有益なる參考書たらん。

原本は表紙の改裝、題簽の散逸せるのみならず、本文中にも標題を掲記せざれども、幸に張附の柱に「犬百人一首」とあるを以て、此五文字を卷中より選拔して新に題簽を補作せり。尙表紙の地色の如きも古版本中より選擇して、本書に適するものを假用したり。（原本松廼舍文庫藏）

江戸名所百人一首

一冊

本書は刊行年月を記さゞれども、元文中の開版なるべし。畫工兼作者は近藤清春にして、小倉百人一首をもじりたる狂歌を主題として、享保年間に於ける江戸府内外の名所百景を寫し、尙その餘興として各階級の人物と流行の物件とを描き添へたるものなり。粗畫ながら當代に於ける名所の景物を髣髴たらしむる所に、風俗志料たるの實用上の價値あるのみならず、畫も彫も共に古拙なる所最も珍玩すべし。

本書には二版あり。岩井守義が「淺草地名考」を見るに、觀音地内久米平内の圖と庵崎の圖とを掲げ、「この二圖享保の頃名を得たる近藤助五郎清春と云ふ者の筆なり、再板の末に近藤助五郎清春筆改直ス」とあり、元板は通油町村田板、再板は元文年中人形町通平野屋」とあり。元板として載せたる久米平内の圖と本書の同圖と異なる點を對照するに、元板は狂歌を左傍に置き本書は之を右側に刻せり。又平内祠の左傍にある文字も所謂元板には寛永二年、本書には寛永三年とあり。いほ崎の圖も川中の船、人物ともに本書のそれに比して大形なり、狂歌も左傍にあり。これらに據る時は、本書外題の下端中央に丸の内に平の徽章を描き、右に「人形町通」左に「ひらのや」とありて、「淺草地名考」の「再板は元文年中人形町通平野屋」と云ふに適應すれば、本書は元文年間再刻本と見らる。されど同書に「元板姥ヶ池有、後に網干場とせり」とあれども、本書七張目裏に「淺草姥ヶ池」、二十四張表に「深川網干場」あり、且つ「再板の末に畫工近藤助五郎清春筆改直ス」とあるに對して本書には「畫工近藤助五郎清春筆作也」とありて、「改直ス」の文字なきは、聊か疑なき能はず。

清春は浮世繪師にして筆耕をも兼ねたり。其著作に係るもの多く正德より延享の間に開版せられたり。繪入狂言本、繪入淨瑠璃本、吉原細見等是なり。其傳記に至りては、式亭三馬が「金の揮」の書入に「清春どうけ百首を畫作して後、俄に兩眼いたみ、竟に盲目となり、程なく死せりと予が幼き時古老に聞傳へぬ」といひ、また「享保の頃中村座の繪看板は清春に限りたるが、死後三芝居とも鳥居家の株となりぬ。清春は鳥居庄兵衛清信が畫風を慕ひてまねたるものゝよし、近頃物故せし清長予に語りき」と識したる外には所見なし。

本書五張目毎に畫工近藤清春の名を記入したり。按ふに初めは五葉づつの假綴册子として、五回に出版したるにはあらざる歟。（原本和田雲村氏藏）

狂歌繪本 大津みやげ

一冊

本書は安永九年の刊行浪華白緣齋梅好著の狂歌繪本なり。初摺本はカッパ摺と稱する刷毛彩色を用

る、再摺本よりは墨刷となりて彩色無し。本書に收錄せる所の三十六圖を以て、「松の落葉」の大津追分繪踊の文句竝に化政度の大津繪節の文句に比すれば、如何にも唄はるゝ圖樣の少くして、本書の收錄の豐富なるを發見すべし。尙「俳諧追分繪追分繪」こそ本書より刊行年月も古く、圖樣も多きやに聞けども、今日まで其原本と對照するの機會に接せざるを遺憾とす。

大津繪の發生は寬永正保の際にして、大谷に近き池の川といふ處に繪佛を描きたるに在り。寬永元年十一月、西本願寺主准如が大谷に龍谷山と命名せしは、此處に群參する信徒の漸く多からんとする景況を卜すべく、當所の繁昌は大津繪の發生を促せるならんか。傳存せる大津繪にして天和以前と推定さるゝものは、阿彌陀乃至三尊佛なるを以ても、大谷の繁昌に副生せる繪佛が、後來の大津繪なることを證せずや。大津繪が元祿の前後までも追分繪とも云はれたるも、京都と伏見との追分にて鬻賣せられたるが爲にして、是れ亦た大谷詣を見當てとせし佛の殘るやうにも思はる。斯く繪佛を主とすべき大津繪は、貞享以後は販路彌ゝ擴まり、往來の旅人にも購はるゝに至り、圖樣は逸早く發生當時の狀態を脫し、需要のまゝに變化しながらも、其粗放にして簡朴なる描法を傳へて特色とせり。享保度に入りては世の好尙も移り、特に浮世繪の發達著しく、やがて大津繪の衰頽を來し漸く新意匠なく、新圖樣なからんとし、遂に寨臼に墮するを致せり。故に後來の大津繪に對する鑒賞は現代的ならず、只管に過去のものとして其簡古樸茂なるを愛せるのみ。更に化政度に至りて大津繪の袋入が發賣せらるゝや、圖樣に十種あるのみなりきといふ、大津繪節に唄はるゝ圖樣の少き

所以を察すべし。時代の下れる文化文政は斯くの如し。然らば時代の上れる元祿寶永は如何といふに、「松の落葉」に擧けたる圖樣は繪佛を除けば十種に足らず、天和正德の間は大津繪の開展期と思はるゝに、其盛況を知るべきものはあらず。此「大津土產」は安永度のものながら、人ありて好事のまゝに懇に誂へしほどに、恰も舊圖古畫を復寫襲描せるばかりの時とて、粉本の數を盡して揮灑せしにもあらんか。故に前後に求むべからざる大津繪開展期の景況を傳ふるものとも謂ひ得るに近し。されども、本書は狂歌を主とし之に大津繪を附載したるものなれば、此カッパ摺を以て大津繪の特色とは見るべからず、繪ビラの大津繪は總て筆彩色なり。

本書の筆者權次の前に又平久吉、後に彌平道則といふがありとも聞けり。元來大津繪の最初の筆者又平に關する傳說の信據し難く、巢林子が「傾城反魂香」の脚色は俗間の臆測を長ぜしめたれど、大津繪の筆者を考證するには却て多くの障碍を加へたる感あり。（原本打越晴亭氏藏）

萬歲躍　一册

本書は萬治三年七月刊行にして今出川助左衞門板なり。序文に「萬歲躍」とありて中には「ゆうほ流躍くどき」とあり。收むる所の唄數は長短合せて十八篇あり。

本書の序文を見るに「躍うたは人の笑ひを種として萬のくどきとぞ成れりける」と記して、唄の內容を擧げ、又「爰に近頃、友甫と云ふ人あり（中略）皆この師の口まねをし侍りて云々」と云ひて、當時

流行したる口説節の友甫と云ふ者に依りて起れることを明かにせり。又挿畫には野郎歌舞伎の玉川千之丞、村上久米之助、藤村半太夫、多門庄左衛門等あり。殊に庄左衛門の六方姿の如き當時の有様を示せる面白きものなり。

此の躍くどきなるものに就きて「新竹齋」の第三卷には「躍總本寺道念が道念くどき願以此功德今日の切狂言」と記し、又「世事談」には「道念山三郎と云輿樗の音頭あり、貞享の頃、盆の躍口説といふをうたひ出したり」とも記したれば、躍くどき卽ち道念節は恰も貞享年間山三郎の創始せるものの如くに思ひ做さるべし。然るに其實は貞享より二十餘年前、友甫に依りて謠ひ出されしものにして、道念山三郎に始まりしにあらざること此書にて明かなり。されば之を演劇の方に牽附けたるは山三郎ならん歟と云ふに、否書中唄の文句中千之丞、半太夫等が四條河原山村座の舞臺に於て、この躍くどきを演じつゝあるとを明示したれば、芝居に結び附けたるも亦山三郎にては非ざりしなり。以上より推測すれば、道念山三郎は此躍くどきの上手にて名聲を博し、本家たる友甫を壓倒して遂に後世躍總本寺とさへ稱せらるゝに至りしならん。何れにしても本書の記事により、躍くどき卽ち道念節は道念山三郎の創始せしものにあらざる事を確め得たりと謂ふべし。

此書、原本表紙題簽とも散佚したるを以て、今假に之を補ひたり。（原本永田有翠氏藏）

たかだち　一册

本書は寛永二年の刊行にして、現存せる繪入淨瑠璃正本中の最古のものなり。而して其形式の横本なると、挿繪の豐かなるとは本書の特色と謂ふべく、次期に屬する正本は總て竪本となりて、挿繪は減少し唯見通しの繪を數箇所に挿むに止むることとなれり。

本書は幸若舞の詞章「たかだち」の舞曲より採り、數箇所に添删を施したるものなり。幸若の舞曲と異なりたる點を擧ぐれば、幸若の方には其一段に鈴木重家が奥州さして發足する時、妻との別れの情景餘りに簡素なれども、本書には妻との對話を挿みて、別を悲しむ人情の機微を漏らしたり。又幸若の方にある簡單なる道行は、本書に删除せられ、中程に重家奥州へ到着し、家重代の鎧の物語に、幸若の方の「熊野本地」より採りたる長々しき腹卷の由來の物語をも除きたり。又幸若の方にては詞章の終りを辨慶が衣河の討死に止め、主人公たる義經等の生死を掻き消したれども、本書には辨慶最期の後、御臺所が若君を刺して自刄する件、義經が腹を切る件、殘る郎黨も腹切り炎々たる火中へ身を躍らす、悽愴悲痛なる終りまで書き添へたり。淨瑠璃操り芝居の正本としては、此添删は內容を整へ當を得たるものならん歟。

本書の挿繪は丹、綠、黄の三色を以て所謂筆彩色を施せるものにて、世に丹綠本又は三色本と稱し來れるもの、一種、往時はゑどり本と云ひたるなり。一見小兒などの惡戯にあらずやと疑はるゝ程の稚拙の味こそ、實に色摺版畫術の未だ發達せざりし時代に於ける特產物たる明證なれ。而して本會が此稚拙なる雅趣を傳へんとして殊更に不器用なる筆彩色を施したること、原本が筆彩色なるが

爲に頗る撮影に困難を感じたりしこと、種々の手數を掛け四ヶ月の日子を費して漸く製版を了したること等は、爰に特記し置く價値ありと信ず。筆彩色は斯道の老練なる畫家に委囑して原本通りに臨模せしめたり。或はその色彩原本に比して聊か鮮麗なる嫌なきにあらざれども、若干の時日を經過するに從ひて、やがて原本のと同一色を呈すべき豫定なり。初より色彩に古びを帶ばしめ置かば、一二年の後には餘りに黒ずまん虞ありて斯く爲したり。

本書原本は尾崎雅嘉、石塚豐芥子等の手を經て現今は松廼舍文庫に珍藏せらる。其四段目に二葉の落張(二張及四張)あるは遺憾なり。依て幸若の「高館」の詞章を次に掲げて假に本書の脫漏を補ふ事とせり。

四之卷二張

(きりのこされたら)んともがらは見しものとおもひなばごせなばとふてたべべんけいが末代のものがたりにまひを一てまはふぞやはやいてたべや人々すゞきやうだいもかれてよういやしたりけんやぐらよりもつゞみを取いだしたゝきあげてぞはやしけるぢたいむさしはさんとにてもらんぶゑんれんの上手まひをばひとてならふたりてうしをうかゞつてたつたりしがかすみにかすんでおほきなるこゑをはつたとあげて一せいをこそとつたりけれうれしやとう〳〵となるはたきの水日はてるともいつもたへせじおもしろやいかだなくだすはたつた川みやこあたりに名河はさまざまおほけれどをんごくながらめいしよかなきりやまたかれの殘のゆ

きゝえたにのつらゝもとけぬれば衣川のみかさまさつておくがたのぐんびやうをべん慶がなぎなたにてみなとをさしてきりながす切ながすともみゑぼしといふきよくを一ひようしはらりとふんでひらいたあふぎをやぐらよりころもがはへさつとなげいれあふぎのおつるよりはやくやぐらをとんでおりたりけりさんのめだちのしらあしげ七き八ぶんあけ六さいに引よせゆらりとのつたりけりわしのおかたをかゞさきにかけんとすゝみけりべんけいがこれを見ていで〳〵むさしあらぎりせんあとをばこなせわかむしやどもとてさきがけしてこそわたしけれむかひはしのぶもとよしたけびまろたをさきとしておくにはわれとおぼしきもの三百きばかりてひかへたるぢんのなかへむさしこまをさつとかけ入たりおくがたのぐんびやうぢんをふたつにわけたりけりされどもこゝに(たかたの太郎)

四之卷四張

(これをはしめ)て七きの人々いれちがへもみちがへさんざんにきつてまはりけりかゝりけるところにとさの八郎たかなうとかめ井の六郎しげきよむずとくんで二人がりやうばがあひにとうとおつゑかめ井ぶさうのかうのものかたきとくむならば大ぜいさだめておりあふべしといろかれてさとりとさをとつておさへてくびふつとかきおとしたちあがらんとするところへとさがめのとの十郎がすきをあらせずおりあひてかめぬがゆんでのかひなを水もたまらずうちおとすかめ井ぶさうのがうのものこゝろはたかさごやたかさごのまつのみどりとはゆれどもいたでおひぬればたちをつえにつきいまをかぎりと見ゆるしやきやうすゞきのしやうじ大ぜいの中にてたゝかひしがをとおとかめ井がいたでおひぞんめいふぢやうなるを見てかたきを四はうへをつち

らしわがみをきつとみたりければいたでにゝらひなく十三ところておふたりいまはかうとおもひてかめ井をかたにひつかけてじやうのうちへつつといりたかきところにおろしをきやそこではらきれかめ井なむあみだぶつともろともにすゞきはしやうれん三十三かめ井の六郎二十六さしちがへてしにけるをおしまぬものはなかりけりむさしばうべんけいはきみの御まへにまいりはやすゞきやうだいうちじにつかまつりて候と申判官きこしめされてなにとすゞきやうだいうちじにしたるといふかさん候と申かめ井が事はさてをきぬあらむざんやすゞきのくによりはるゝくだりよになきしうのかたうどしてうたれぬるこそむざんなれけさよりよむ御きやうもはやほうなうの時分になるぞふせひてたべ（やむさしどの）

其表紙はもと西の内に類似せる紙に外題を直接摺に爲したるもの、今は保存の便を圖りて別に厚表紙を附加し、貼外題をも加へ、尚表紙の色は江戸時代初期に行はれたる表紙の特色を參酌して摺出せり。（原本松廼舍文庫藏）

亂曲揃　一冊

本書は加賀掾宇治嘉太夫の正本にして、二張より始まりて十五張にて終れり。一々頭註を加へ、節附を施し、「和氣清麿」以下の十章を收めたり。此種類の書中稍形式を異にしたる珍本といふべし。奥書に「右者加賀掾宇治好澄直之正本口傳寫也、天和辛酉年霜月吉祥日」とあり。八文字屋八左衛門の板なり。

このたぐひの正本に節附を施したるもの、又挿繪を入れたるものは往々にしてあれど、頭註を加へたる形式は他に類例を見ざるものなり。但し此形式は其頃の謠曲本中に例あれば、本書はそれに習ひたるにてもあるべし。尚此書の題名に「亂曲揃」の文字を選みたるも、亦謠曲に學びたる命名ならんと推定せらる。蓋し亂曲は觀世流の謠曲に限られたるものにして曲舞の所にて謠ふものなり。其文字正しくは闌曲にして、卽ちたけなはなる曲なり。後に蘭曲又は亂曲とも書きしは音借して用ひしならんか。何れにしても闌曲に舞はなく獨吟にて節を十分に謠ふものなれば、淨瑠璃の所謂景事にも當れるにや。加賀掾がこの名を選びしは故なきにあらず。按ふに加賀掾は其頃最も謠曲の流行せりし紀州和歌山の產なりし上に、平生謠曲を好みて堪能なりきと云へば、かたゞ〳〵謠曲より一轉して一流の淨瑠璃を創めたりしものならん。その京都に上りて伊勢島宮內に賴り、戲曲樂に志を傾けしは寬文の中頃なるが如く思はるれば、齡三十三四歳の頃ならん歟。何れにしても謠曲の素養を戲曲樂に利用したりしこと明かなり。寬文の末には旣に師に代りて芝居を興行し居れるを見ても、彼は天禀の奇才に富みしなるべし。延寶三年には旣に獨立して一流の祖となり、「大磯頓生記」と云へる段物を刊行せり。本書「亂曲揃」の刊行よりは七年前、未だ加賀掾を受領せざりし三十九歳の時なりしなり。又延寶八年には「赤染右衞門榮花物語」といふ八行本を出しゝが、是れ今日の稽古本と稱する八行本の始めなり。此八行を選びしも謠本を學びしものの如し。

本書に類する正本は、「亂曲揃」の刊行の四年前、卽ち加賀掾受領の翌年、延寶六年三月に「道行揃」

あり、同年八月に「竹子集」あり、同九年六月に「大竹集」あり。その七月、天和と改元ありて十一月に「亂曲揃」を刊行し、猶續いて貞享二年七月に「小竹集」を出し居れり。當時は彼が井上播磨掾と覇を爭ひて最も得意なりし時代なれば、本書を刊行するに方りても、手一杯に物好きを盡ししならんか。要するに加賀掾は天和貞享に全盛にして、元祿は既に得意時代を過ぎたりき。

本書に收むる所の十章中、第一の「和氣清麿」第二の「同華奢物語」は新作なれば卷頭に掲出したるらしく、他の八章に至りては、「道行揃」、「竹子集」、「大竹集」にあるもの、再錄に過ぎず。殊に「三社の詫宣」の如きは、最も得意とせし作なるべし。就中正本中近松巢林子の作に係るもの多きを占むとは、斯道の識者に依りて唱へらるゝことなるが、本書中に於ても其面影の見ゆるは、「菜花物語」「平安城都うつし」、「十六夜物語」などにて、「船遺恨」は「奈須與市小櫻縅」の、「牛若千人切」は「熊野牛王」の飜案なるが如し。

本書の複製に就きては、其節附けの校正を特に嚴密にしたり。原本には蟲喰ひの箇所多くして往々文字の不明なる點あれども、遽に別本を求むるに由なく、依りて各章の掲載せられたる諸書に就きて校正を遂げ、辛うじて缺字を補ひつゝ、やがて遺憾なき程度に至ることを得たり。

（永田）

仙人龍王威勢諍

一冊

本書は寛文十一年刊行、江戸通油町伊勢屋板、外題小書に「奥州道行松島八景」とありて、六段より成れる虎屋永閑の正本なり。

挿畫ある淨瑠璃本の刊行は、寛文の初より享保の末に及びて、畫面は作意と共に漸く變化し、其時代の風俗を描かんとする傾向を現ぜり。特に元祿度の刊本は俳優を繡像し、若しくは機關（からくり）の舞臺面及び樂屋等を寫し出せるは、讀者の目に新奇ならしめんとせし爲なり。蓋し斯く挿畫に意匠を費しし、淨瑠璃本が他の假名草紙に對して新しき讀物として珍重せられし故なり。されど天和以後は彼の浮世草紙の爲に次第に其讀者を奪はれ、八文字屋物の出づる頃に及びては遂に其跡を絶つに至れり。

本書の挿畫の如きは搖籃の中に在りし浮世繪の一標本として注目すべき價値あり。寛文度は淨瑠璃の名手東西に輩出せし時代なるが、この「仙人龍王威勢諍」の如きは頗る特色あるもの、一なり。生贄、龍女等在來の脚色中に、金平式の殺伐なる傾向をも存しながら、更に井上播磨流の景事や道行をも添加せり。即ち新舊雜糅の過渡期を暗示し、早くも永閑一派の將來をほのめかしたる作なりとも見ん。（原本永田有翠氏藏）

文七一周忌

一冊

本書は所謂虱本の細字正本にして、作者は山本飛驒掾なり。版行年月を記さゞれども、元祿十五年

八月廿六日雁金文七等の處刑後、其一周忌に伊藤出羽掾の「からくり座」にて興行せしものなれば、元祿十六年の刊行なること明かなり。

飛驒掾は山本彌三五郎と云ひ、名人と呼ばれしからくり師にして、人形も遣ひ作者をも兼ねたり。作は甚だ稀なれども、出羽掾座の正本に幾種かあり。「愛宕將軍地藏」の如きも同人の作にて、其奥書に、座元の出羽太夫信濃掾(岡本文彌、初め出羽掾、後信濃掾受領)と手づま太夫飛驒掾と竝べて大書し、下に淨瑠璃語岡本利太夫、阿波太夫、半太夫を列ね、飛驒掾の傍らに淨瑠璃作者源清賢と書せり。清賢は飛驒掾の實名なり。尙此他にも清賢の署名ある作あり。但し出羽掾座以外の正本には未だ見ざる所なり。當時竹田出雲のからくり座と伊藤出羽のからくり座とは、兩々相對峙したりしが、後者常に優勢なりしは、彌三五郎の工夫の巧妙なるに因りしならん。本書中にも船を使ひたる邊、及び文七が侍を水中に切込む邊などに、特種の工夫ありしもの、如し。

所謂からくりは見世物なれば、飛驒掾の興行は操りにからくりを取込みたるものなりきとも評すべし。「水がらくり切一段」と特に斷りたるも、其實水を使用するからくりを操りに結び附けし迄なり。要するに操りにからくりをも、踊をも、芝居(本書十一張表參照)をも合せ用ふるは、普通の操座にてはせぬことなりしが、からくり座にては定例として行ひたり。按ふに是等の例が後に芝居に影響して、所謂大道具の大仕懸を發達せしめしならん歟。

又雁金文七の淨瑠璃は「外題年鑑」に見えたる岡本文彌「出羽掾」のが其第一にて、元祿十五年の處刑

後十一二日を過ぎし九月九日に初日を出だし、由記せるが、宇治加賀掾も同年に此淨瑠璃を出だし事西澤一風の隨筆に見ゆ。其淨瑠璃中「清川道行」の文句に、雁金文七や曾根崎心中(元祿十六年なり)の繪双紙の噂あり、又文七の死後三年といふ詞もあれば、當時の作にはあらざるが如し。されば岡本文彌の作に次いで出でたるは、飛驒掾作の本書を推さゞるべからず。五人男を人口に膾炙する俠客と爲さず、殺人の兇漢として有の儘に寫したる古風の點に趣ありとす。(原本永田有翠氏藏)

曾我扇八景　一册

本書は俗に「風本」と稱する竹本筑後掾の淨瑠璃正本なり。版行の年月を記さゞれども、「外題年鑑」に寶永三年七月興行とあれば、近松巢林子が五十四歳の作にして、其開版も恐らく該興行を多く隔てざるものならん。

本書は上中下の三段より成りたり。近松の淨瑠璃中の所謂世話物の大部分は三段に分れ居れり。世話物にて最も古き「曾根崎心中」の如きも一段物と成り居れど、これとても三ツに分れ居る形跡あり。特に世話物のみならず、時代物にも往々上中下の三段ものあり、本書の如き是れなり。此近松作の淨瑠璃正本が三段に作られたるに就きては、歌舞伎狂言の模倣にはあらざるかと云ふ說もありき。又この頃風本には、道行を特別に取扱ひたる形式あり。本書の如きも見返しに「曾我兄弟道行」を掲け、本文挿圖中に其繪のあるにも拘らず、玆にも小さき道行の繪を挿入し、下の卷に冒頭に「此所

道行口に有」と斷り書あり。或はまた道行を卷の末尾に掲げたるもあり、正德二年刊本「傾城吉岡染」の如きそれなり。道行を特に本文より引拔きて見返し又は末尾に載せあるは、淨瑠璃の道行は殊に太夫の喉を聞かする所にして、いろ〳〵の節を取込みあり、聲曲家の最も力を傾注する要所なるが、又人形の方にても振事など見する所なりき。されば道行本として特に道行のみを集め、節、譜を施せるものをも出版せられあり。是等は市井に於て音曲を口眞似する輩、これに依りて今日のさわりを口三味線にて唸るが如く唸りたるより、元來讀むことを主とせる虱本にも、稽古本のそれの如く節、譜を施して、道行を特別に扱ひたるに由るならんか。

本文各張の境界線頗る不器用に繼合せられたるは特に注目を要す。尙本書は第三張より始まれるが、此は當時の繪入淨瑠璃本及び繪入狂言本等に存せし製本上の慣例に從ひしなり。蓋し表紙を第一張見返しを第二張と數へしなるべし。（原本早稻田大學圖書館藏）

風流謠年代記　一冊

本書は作者不明なり。序文に萬みん呂跋文に畔李齋の署名あれども、其何人なるかを詳にせず。奥附に依りて寶曆七年正月刊行の江戸版たることを知る。

謠曲内外二百番の題目と其内容とを巧に編綴し、年代記に擬作せるものにして、鼇頭に謠曲の詞章の一句を捉へ來り、之に四十六面の見立畫を添へて感興を惹きたる處、著者工夫の痕を見るべし。

當時謠曲は都鄙を論ぜず上下を通じて流行し、彼の寺子屋の如きも之を兒童に授けて一課目と爲したるものありき。されば宴席等にて小謠一つも諷ひ得ざる者は、肩身の狹き感ありし程にて、隨つて之を戯作の骨子に扱ひたるもの少からざれど、年代記體に戯述したるは、蓋し本書を以て第一とすべし。（原本松廼舍文庫藏）

舞曲扇林　二冊

本書は我歌舞伎劇の基礎となれる舞踊の淵源を說明せるものとして最も古きものに屬す。一說に貞享三年板とあれども、跋に作者河原崎權之助とのみありて、出版年月を缺きたれば詳ならず。本書を貞享三年刊本とするは、廿三年以前大阪にて「彌五左衞門非人仇討二番狂言を始む」とある、「非人仇討」の興行は、寛文四年なれば、貞享二年は恰も二十三年目なれば、脫稿の翌年に刊行したるものなるべし。然れども書中伊藤小太夫を惜める意あり、「舞臺大鏡」の貞享四年版には、伊藤小太夫とありて、元祿元年版に伊藤古小太夫伊藤今小太夫とあるを見れば、本書を小太夫が死せる後に成れりとせんには、貞享三年の刊行を肯定し難し、刊行以前に增補せられたるにや。されば元祿初期の刊行たることは書中の記事並に傍證によりて知らる。此河原崎權之助は初代にして、筑前山崎の產、能樂に通し、京都に出で、能を芝居に轉化せさせ、能座なるものを興し、後寶生太夫の勸に依りて江戸に下り、慶安元年木挽町に河原崎座を創設し、兼ねて江戸歌舞伎に新樣式を與へたり。故關

根只誠氏の手記によりて物せられきといふ關根默庵氏の「演劇大全」に據れば、一時停止せられし芝居の萬治三年再許となり、森田、中村、山村、市村の四座の定設狂言座の外、操り、淨瑠璃、女舞などにて江戸に興行物十八軒あり。河原崎權之助の狂言座も萬治の解停後に森田座が興行を休む際、ある年期間興行權と小屋を借り、假櫓にて河原崎座の興行をなしたり。とにかく彼れは舞と踊との分岐點に立ちて、後の江戸所作事の淵源を開ける俳優と稱すべし。文才もありて續き狂言の作あり。本書は慶安以來の江戸歌舞伎の成蹟を錄したる有數の稀書なり。挿畫は何人の筆なるか詳ならず。菱川派とは見ゆれども、師宣、師房、師重等の筆にはあらず、長谷川長春、鳥居清元等の筆にもあらず。其中一種特別なるは第二圖の男舞なり。ことは或は繪卷等より轉寫せしものならんか。要するに江戸歌舞伎の最も古き記錄なり。渡邊霞亭氏の愛藏本は蜀山人の舊藏本にして、下卷は刊本、上卷は寫本なるが、蜀山自筆の奥書に、山東京傳も亦其完本を見ざる由を記しあり、以て文化文政の頃既に珍書たりしを知るべし。

この書は近く刊行したるものあれども、惜むらくは原版の眞趣を傳ふるに足らず、加ふるに挿畫をさへ幾つも省きたり。本會は極めて忠實に、松廼舍文庫所藏（關根只誠翁舊藏）の良本を底本とし、更に渡邊霞亭氏の藏本を以て題簽を補ひ、文字をも挿畫をも原版通に精巧なる木版に彫刻せしめたり。（原本松廼舍文庫藏）

剝野老（ところ）

一册

本書は寛文二年の刊本なれば、江戸に於ける役者評判記の濫觴とも見るべし。若道全盛の當時のこととて、其批評も後世の評判記のそれと違ひ、技藝よりも容姿を主として月旦せり。

されば本書の外題も亦役者の容貌に因みたるものなることは、本書の舊藏者石塚豐芥子が「剝野老」と云ふ外題は、此頃野老を蒸して茶菓子に出す。皮をむくと至つて色白く奇麗なるゆゑに、舞臺子」の氣量のよきになぞらへて、かく名付しなるべし。又野老を野老（やろう）といふ故に野郎、野老の音にとりて剝野老とせしもの歟。總て此頃は役者の事を野郎と稱せしなり」と云へるにて知るべし。

本書には劇界の美少年を勘三郎座、古へ座、新傳内座の三座よりすぐりて廿五人を選びたり。筆頭には中村勘三郎を置く、是れ萬治元年元祖猿若勘三郎死し、明石十二歳にて二代目を繼ぎ、猿若を中村に改めたる勘三郎にして、此時十六歳若衆の太夫なり。それに續き玉村吉彌、玉川千之丞、伊藤小太夫、花井才三郎などを列ね、殿りを梅澤掃部にて結び、取り〳〵に褒貶せり。當時この三座共堺町にあり、いにしへ座と新傳内とは竝び、勘三郎座は新傳内座と相對して向側にありしことは挿畫にて明瞭なりとす。此のいにしへ座と云へるは、寛文二年より廿七年前の寛永十年正月に都傳内が櫓を許されし座なり。されば堺町には其頃傳内座は新舊二座櫓を竝べ居たるを以て、一をいにしへ座一を新傳内座と云ひたるならん。

惜いかな原本の題簽は逸したり。他に類本を見出す能はざる程の珍本なれば複製本の題簽は本文中の文字を引伸して之れを補ひたり。（原本松廼舎文庫藏）

難波立聞昔語　一冊

本書は貞享三年の刊行に係はる太夫本卽ち役者評判記なり。序文には「難波立聞昔語」、その次に「三芝居昔語後序」と題し、本文に「難波昔語三番續」とあり、又卷尾に「太夫本嵐三右衞門座千秋萬歲終」と記したるが、著者も版元も不明なり。

内容は嵐座の役者を評判したるものなれど、容色本位時代の少年俳優を目的としたるなれば、藝術の巧拙を主とせずして、容姿の優劣を第一と立て、穿ち、穴探しを試みたるに外ならず。役者の給金も待遇も技藝の外に在りしことは、此書によりて明かに知らる。例へば上村辰彌が百三十兩の高給を得て一座を凌ぐ如きは、當時斯界の大勢を語る端的の事實なり。繪は顏見世、中狂言、切狂言の三番を挿み、張附も一、二を省きて三張より始め、初張に序文と記せるなど淨瑠璃本、芝居本に多く見る例を逐へり。

本書の原本は表紙を改竄し、題簽も失はれたれば、止むを得ず卷中の文字に因りて外題を補ひ、表紙は永田本のそれを模したり。（原本永田有翠氏藏）

傾城王昭君　一冊

本書は元祿十四年の刊行にして、初代市川團十郎の作、堺町東かは町板元かいふや新板なり。角書に「惠方鎌足鎌、鬼門入鹿弓」とありて、猶大名題の上、富士山形の中に「兵夢想」の三字を冠せ「傾城王昭君」の書名を記せり。又卷末に「右此本者中村座惣役者子共はやし方上るりせりふしよさあひのつめ合迄銘々の諸藝音曲を一番目より四番目迄一字一點無誤相改此度板行仕候」とありて、所謂虱本の狂言本なり。

内容は毎張十七行の細字にて、一張おきに各場面の見通し圖を挿み、讀み五張、畫五張より成れるもの。卽ち市川流の荒事に當年渡來の象の評判喧しきを取入れ仕組みたる時代物にして、入鹿大臣の横暴に鎌足の家督譲りを骨子と爲し、之れに乳守の里なる山上源内左衞門、妹あやの、女房宿木の苦忠をからませ、やがてそれに因みて、「傾城王昭君」の名題を附したるものならん。此時象を如何に取扱ひたるかは不明なれども、「山上が酒の肴に入鹿めがいで引出物にいたさんと、彼の大象を切つてかくる、源内摑み挫がんと立上る云々」の文句もあり、又註書きに「宿木象を繫ぐ所、外記淨瑠璃にて所作あり」ともありて、後の市川家の十八番中の象引はこの狂言より出でたることは、石塚豐芥子の「歌舞伎十八番考」にも記されたり。

寛文四年初めて市村座に於て「續き狂言」の上演せられし以來、作者を兼ねたる俳優に依つて、同種

の脚本次々に著作せられ、才牛（初代團十郎）の如きも、特に自家の藝風に適應せる時代物に一機軸を出し、或は王朝に關する事柄、或は源平時代、足利時代に關する事實に托して、之を四番續き、五番續きに脚色せり。本書の如きは才牛が得意とせる筋のものにして、元祿十四年、卽ち彼が技能の熟練したる四十二歳の時の作なり。

又挿畫は普通の狂言本とその式を同じうし、見通し一張を源氏雲形にて上下に區劃したれども、其主とする荒事の場は區劃を除き、大きなる人物を露出せしめて活躍の趣を示したり。畫工の署名はあらざれども、恐らくは鳥居清信なるべし。當時清信は才牛の舞臺顏を寫すに名聲ありき。其父清元はもと大阪の俳優なりしが、業を廢して貞享四年江戸に下り、翌元祿元年より看板畫に筆を染め所謂芝居繪風を創始せる鳥居派の元祖となりたり。又清信は元祿十三年にかの有名なる畫本「四方屏風」を出して盛名父を凌ぎたり。かゝる際なれば才牛が此の書の挿畫を委囑せしも偶然にあらざるべし。此の挿畫を「四方屏風」のそれと比較するに、頗る酷似する所あるを見る。之を清信が三十八歳の筆と斷ずるも强ち早計にあらざるべしと信ず。

原本は完全に保存せられたる佳本なり。表紙も十分の古色を帶び、貼外題も幸に毀損せられずあるは珍とすべし。（原本松廼舍文庫藏）

けいせい筑波山　一冊

本書は京都の書肆八文字屋八左衞門の出版にして、都萬太夫座の狂言本なり。狂言本は後に云ふ芝居筋書なれども、本書の如きは異式なりとす。卷中刊行年月なく原本表紙に享保二年開版の貼紙あれども、這は誤なり。版元の口上書にも「座元瀨川菊之丞二の替り江戸上り大谷廣次大々あたりほうびにゐすがたを江戸風にかゝせ云々」とありて、大谷廣次の爲に特に出版せしものゝ如くなれば旁以て本書は享保十年の刊行たること明かなりとす。

「役者評判記」又は「菊屋彫」等に據れば、初代瀨川菊之丞が京萬太夫座の座元となりしは、享保七年十一月より同十一年迄なり。又初代大谷廣次は享保二年には市村座附にて、同八年十一月大坂嵐座へ上り、九年十一月京瀨川菊之丞座へ轉じ、其の二の替りに當金茂右衞門を演じ、而して同十一年には嵐重次郎座へ轉じぬ。又享保十一年刊行「役者正月詞」の大谷廣次の條に「去々年辰の年霜月、顏見世狂言出來され、二の替り（十年春興行）とうがね茂右衞門にて名を上げられ、浦々までも評判が廻りてお仕合云々」とあるにても、此の「けいせい筑波山」の刊行は享保十年なりと斷定するを得べし。

狂言本と稱し來たるものに二種ありて、一は其筋を精細に緩り、一は簡略に記せり。本書は大體に於て後者に屬するものとすべし。但し表紙裏の見返しに二の張附ある點、役者の役名を列記する點三の張より本文の始まれる點等は、普通の狂言本の形式に從へれど、本書には一の著しき特徵あり。例へば見通し二頁を二段に劃して繪草紙風に挿畫を細に描き、それを僅に二三ヶ所挿むを例とする

狂言本とは違ひて、初張より終りまで挿畫を著大に物して狂言の筋を明示し、筋書は却て鼇頭に略記したり。即ち筋書と繪双紙を兼ねたる一種特別の狂言本と見るべし。蓋し享保の末期より元文寛保の間は、筋を主として挿畫を客としたる(元祿享保間の)ものより、繪を本體とする所謂繪双紙(寶暦以降のもの)への過渡期にて本書の如き形式が主として行はれたるらしく、其點より觀ても狂言本の版式の變遷を語る好資料と謂はざるべからず。

此作は主人公を當金茂右衛門とし、慶長十年上總國東金の里正市東刑部左衛門が吏を殺して自裁せしことを脚色せるものなり。

當金茂右衛門の事は享保十三年版河東節「酒中花」にも見え、又江戸長唄「とうがね」の一曲は今も傳ふる程なれば、廣次が二の替りに之を演じて人氣を博せしならん。挿畫も江戸風にかゝせと特に斷りある如く、所謂鳥居風にして筆勢凡ならず、手一杯に活躍する所摸倣的のものとは見えざれば、或は當時江戸に於て歌舞伎の看板繪本類を殆ど一手に描きたる鳥居清信の作と視るべきか。何れにしても普通の上方版狂言本とは異なるものなり。

本書の原本は總ての點に於て間然する所なき良本なりしを以て、本文は勿論、表紙題簽等に至る迄も此較的容易く原本通りに複製するを得たり。(原本永田有[illegible]氏藏)

花相撲源氏張膽　一冊

親船太平記　一冊

菊慈童酒宴岩屈　一冊

この三本は江戸歌舞伎三座の彩色摺本にして、何れも紙數五張より成れる同一形式の横本繪番附なり。刊行年月を記さゞれども「歌舞伎年代記」に據れば、「花相撲源氏張膽」は中村座、「親船太平記」は市村座、「菊慈童酒宴岩屈」は森田座に於ける、安永四年の顔見世狂言なり。

此種の繪番附は明和安永の頃にのみ行はれたりと云へると、又彩色摺横本繪番附は此三種に限れりと云へるとの兩說あり。通例劇場内にて客に賣りたる墨一度の粗製品とは全く選を異にす。蓋し主として柳營又は諸侯方の奥向用として特製したる品なりと謂へば、其刷出部數も少數なりしなるべし。斯く完全なる姿にて今日まで傳はれるは最も珍らしく、斯道の好事家諸氏中にも初めて見たりと謂ふ人尠からず。

「花相撲源氏張膽」には、表紙に櫓の紋章銀杏の葉を散らして中村座を表したり。作者金井三笑、畫工鳥居清經なり。三笑は平兵衛鳳高と云ひ寶暦以來斯界に知られし人、清經は鳥居三世たりし初代清滿の門人にして、多く繪番附を描きし畫家なり。

當狂言は「歌舞伎年代記」を見るに、中村仲藏の鎭西八郎爲朝漁師姿にて、嵐市藏の田代冠者信義山下金太郎の眞鶴姫の難を救ふ暫もどきの見得もあり。一番目種蒔三番叟にて所作もあり、又二番

目に猫の化物の滑稽もありたる如く、大切は淨瑠璃、富本豐志太夫、同伊津喜太夫の「四十八手戀所譯」にて、嵐三五郎の河津三郎、中村仲藏の股野五郎、瀨川菊之丞の傾城喜瀨川登場し、上の卷河津股野の相撲、下の卷鴛鴦の所作事になる趣向にて、其評判全都の人氣を集中せりと云ふ。されば、にや此「四十八手戀所譯」の淨瑠璃は後々までも富本の語物として傳承せられたり。最後の見通し一張の圖は卽ちそれなり。此富本豐志太夫と云ふは、文化年中豐前椽と改めし二代目豐前太夫なり。十六歲にて始めて劇場に出でたりと云へば、安永四年は其廿二歲の時なり。すなはち豐志太夫と改名して間もなき頃なるべし。又伊津喜太夫は初代豐前椽の高弟にして、元武家に生れ、剃髮後延壽齋と號し初代歿後自ら脇語となり。豐志太夫を後見したる名手なり。

「親船太平記」には、表紙に櫓の紋章橘を散らして市村座を表したり。作者西川鈍通、畫工淸經と署名せり。鈍通は通稱與三兵衞、初代津打治兵衞の門に入り佐十郎と稱し、初代歿後、寶曆十二年二代目津打治兵衞を襲ぎ、明和二年西川鈍通と改稱せし脚本家なり。

當狂言は寬延元年(安永四年より三十八年前)同じ市村座に於て二代目團十郎の演ぜしものにして、其時は「貢船太平記」と云へりと歌舞伎年代記にあり。この「親船太平記」の時には、最初に長唄柴田小源次、杵屋作十郎連中の「島臺丹前」にて、市村龜藏(後九代目羽左衞門)の脇屋二郎義助、瀨川吉次の朽葉の內侍の所作事あり。　市川海老藏(四代目團十郎)の篠塚伊賀の暫、中島三甫右衞門(二代目)の坊門淸忠の公卿惡、宮崎八藏の孫六入道の鹽坊主、坂田半五郎の陽明之介の腹出し等もあ

り、猫坂東太郎の大森彥七、三甫右衞門の鬼女もあつて、特に淨瑠璃を初めに置きたるは、後世とは其趣を異にせり。

「菊慈童酒宴岩屈」には、表紙に櫓の紋章酸漿を散らして森田座を表したり。本書に限り作者も畫工も署名せず、然れども當時森田座の立作者は增山金八なれば此狂言も多分同人の作なるべし。畫家も他二本と同一なる畫風なればこれも亦た淸經なるべし。

當狂言は「歌舞記年代記」に據れば、團十郎(五代目)の足柄山の山姥、檀拾ひ五郎太實は仲光一子幸壽丸、相馬太郎良門、白獏化身の四役、富十郎の美女丸、廣右衞門(三代目)の袴垂保輔の魔術にて酒呑童子のやつし、廣次(三代目)の金時にて暫のせりふあり、三津五郎の渡邊妻さよ風。二番目、門之介の賴信、下り芳澤いろはの闕白兼道息女粧姬、富十郎の安倍のお淸にて茶筌賣の件あり。この狂言には一日中に三度所作あり。卽ち第一は二張目の表畫面がそれにして、美女丸、源賴信、粧姬の所作「一奏菊の粧」是れなり。第二は三張のそれにして、茨城左衞門とさよ風との所作「破車簾追風」是れなり。共に長唄にて、松永忠五郎、杵屋正次郎の連中なり。第三は大詰の中村富十郎の女占方(茶筌賣)と賴信と粧姬の所作「樹花戀浮船」と云ふ常磐津文字太夫の淨瑠璃是れなり。富十郎が茶筌賣を演ずるによりて、既に其頃劇壇を退き居りし文字太夫をば、演者の懇望に依りて特に起し來り、當時「立」の資格ありし兼太夫を脇に据ゑて上演せしことなれば、其評判三座中第一なりき。吉例として出したるにや、將た偶然なるにや、三座とも暫のあるは面白し。市村座に於ける海老藏

の暫はさることなれども、森田座には團十郎の出勤せしにも關はらず、大谷廣次が暫のせりふを言ひての荒事、中村座にては中村仲藏の暫に擬するなど、當時の潮流を察する資料たらん歟。

原本は何れも表紙も完全にして題簽を用ひず、三色摺の上へ直接に外題を摺出し、内容は五色摺となしたる古色掬すべきものなれば、此複製には最も意を注ぎ、原本と對照して毫釐の差錯からんことを期せり。（原本松廼舍文庫藏）

日下開山 名人ぞろへ

一冊

本書は所謂小形赤本なり。題簽標目の左傍に「ほうかの根元」とあるは「放下の根元」の意義なり。後世俗語にて「手品の本」など云ふに同じからん歟。其下に一線を劃して「藤田」と横書したるは板元なり。然るに「名人ぞろへ」といふ標目と内容一致せず。「世界國盡し」など云へる名の相應しき點より推測すれば、他書の題簽の誤貼にあらずやと疑はれざるにあらず。

小形赤本は草双紙の前身にして、世に行成表紙本と稱するものより一變し來れる丹表紙の小本なり。丹表紙としては古きものに屬す。延寶天和の頃既に存在したりきと云ふ。本書の如きも其結構風趣より推測すれば、元祿頃のものならんと思はる。

小形赤本の筋書は概してお伽噺風にして、多く題材を桃太郎、かちかち山などに採りて、繪を主とし、往々にして上下二册續きにしたり。然るに本書は稍風變りにして、題材を皆海外の事物に取りたるは、外國との交通の次第に頻繁となり來れる其頃の世態を察するに足る。其體裁の如きも後の草双紙類の前驅たることを暗示し居れる點に多少の趣味無きに非ず。

赤本は元來兒童の玩弄用なりしが故に、彫刻も摺方も粗笨にして、用紙の質も良からず。爲に原本甚だしく鮮明を缺きたれば、複製本も他書に比して聊か精妙を缺けるは止むを得ざるなり。（原本永田有翠氏藏）

桃太郎

一冊

本書は草双紙の鼻祖と稱せらるゝ赤本の一種にして、開版年月は之を記さざれども、享保年間の刊行なるべし。著者は藤田秀素と云ひ、享保中在世の浮世繪師と知らるゝの外詳かならず。然れども外題に奥村政信の印章に用ふる瓢形の中に、「ゑ奥村」の文字あれば秀素は政信の門人ならん歟。此人の筆跡極めて稀なり。

草双紙中にて赤本の前驅をなせるものに行成表紙本と小形赤本とあり、而かも赤本を以て其鼻祖と稱せられるは、赤本一たび出でゝ此種のものゝ形式始めて一定し、後に出でし黑本乃至青本等は孰れも其體裁に倣ひたるものなればなり。

本書の原本は彫刻も印刷も用紙も悉く麁雜なり。さるは兒童の玩弄品として發行せられたるに過ぎざればなり。隨つて發行後幾何もなくして多く紙屑籠に葬られ、今日まで傳存せるもの極めて稀に

して偶〻遺りたるは珍本として取扱はる。本會が古書の標本として大小二種の赤本を複製せし所以此に在り。

松廼舍本は其貼外題を逸したるが、幸に黒柳重昌氏此書の題簽と表紙とを藏せられたるを以て、本書の複製本を原本通り完全のものと爲すを得たり。

新版 なぞづくし

一冊

本書は紙數五張より成れる黒本の繪本にして、鰲頭に二重謎を掲げたり。出版年月を記さゞれども、鱗形屋の開版なることは、丸に三鱗の標章、貼外題にも卷末にもあるにて知らる。又畫工の署名はなけれども、畫風富川吟雪に酷似する所あり。「增補浮世繪類考」に據れば、吟雪は西村重長の門人にして、もと繪双紙問屋なりしも、後畫工となり戯作もなしたりと云へば、本書は吟雪の著作に係るものか。且つ謎の體その他を綜合して推考するに、寶暦の初期に開版せしものならん。

謎は古くより行はれたり。初は上流社會の一種の遊興として和歌などに詠み込みたるもの、如し。「拾遺集」にも謎の歌合あることを記し、又「翁草」にも勅製謎の御歌といふを擧げたり。又「甲陽軍鑑」十二、永祿十二年甲州勢の小田原攻の條に、內藤修理と馬場美濃の謎のかけ競べあり。其頃は未だ二重謎のみなりしやうなり。寶永正德頃のものかと思へる「御伽新二重謎」あり、寶永三年に「御所謎」の刻本もあり。萬治寛文頃にはや、民間に移り、殊に江戸の町家にて流行し始めしは延寶の頃よりならん。享保には謎合盛んになり、同十三年には「新選何曾遊び背紐」といふ二重謎の刊本あり。遂に願人坊主が謎、判じ物の鼠半切に摺りたるを持歩き錢を乞ふまでに發達し、其間には强請の弊害をも生じ、十四年四月廿五日「願人共謎判じ物板行いたし町々へ持廻り候儀無用に可致候云々」といふ觸書の出づるに至れり。以て其流行の滔々たりしを想像すべし。然れども此抑制は弊害を防ぐのみにありたれば、斯道はます〻發達して所謂三重謎となり、明和に至り謎を以て聽衆を集め、錢を乞ふ者を生じたり。「明和風俗集」に「明和七年三月には湯島天神開帳の時、非人に彌太坊主と云ふ者社內に往來し、木魚を叩き衆人のかける謎を解き、一錢二錢の合力を受けしは人皆珍しがりし」とあり。更に降りて文化十一年には淺草奥山に謎坊主春雪出で、翌年は三笑亭可樂も謎を呼物とせし事は人の知る所なり。

今本書を見るに「新板なぞづくし」とは云へど、强ち新しき物のみにはあらず、三張裏の繪に書入れたるものの如きは「似我蜂物語」の下にある「なぞ〳〵、いろはほへとなに、そばなる人、それはに、はとり」と云へるもあり、又「新かはりなぞ盡し」に載せしものを借用せるもあり。其他にも洗張りのものもあるやうなれど、當時の二重謎より三重謎へ移らんとする傾向を見るに便あり。

本書は表紙外題とも完全にして、黒本の代表物として間然する所なきものなれば、原本に些の相違なからんやうに注意を加へて複製したり。（原本松廼舍文庫藏）

又燒直鉢冠姫　稗史億說年代記　三冊

本書は式亭三馬の作にして、享和二年の刊行なり。是より先天明三年に櫻川吐芳作「草双紙年代記」あるにより、特に「又燒直」の三字を冠せるなり。

所謂談義物は僧侶の法談に始まり、書物の形を成すに及びて談義物と概稱せり。初は其内容堅くるしかりしが、次第に俚耳に入ることを努めて、後世の所謂穿ちをも此に萠芽するに至れり。而して其最も輭化せるを洒落本とし、黄表紙とす。其催笑的の穿ちと趣味ある挿畫の發達は大に世の歡迎を受け、其評判記まで出版せらるゝに至りたり。一例を擧ぐれば、洒落本に對しては天明版の「戯作評判花折紙」あり、黄表紙に對しては「稗史評判岡女八目」、「江戸土産」、「繪双紙評判菊壽草」等あり。通人粋客中には黄表紙通、洒落本通を以て任ずる者も多かりき。三馬の此著ありし所以なり。

其文章に其挿畫に一々意匠を凝らし、黑本、青本各時代の變遷推移を一目に瞭然たらしめしは面白し。按ふに著者は一時の興を以て述作せしに過ぎざりしならんが、今日より見れば我が遊戯文學史の參考に資すべきものなり。

是を以て表紙の貼外題は勿論、用紙の質の如きも忠實に原本を髣髴せんと努めたり。即ち本文は松廼舍文庫の藏本に據り、題簽は早稻田大學圖書館の藏本に據りて補ひたり。

當世風俗通　一冊

後編女風俗通　一冊

「當世風俗通」は安永二年夏の版行にして「後編女風俗通」は同年秋の版行なり。著者金鶴先生とあるは從來久しく戀川春町ならんとの說なりき。さるは春町の名作「金々先生榮華夢」の主人公に金鶴先生といふがあり、又序文及び本文の書體の彼が自筆に酷似したればなり。或は享和三年版の「麻疹戯言」の四方眞顏の序文中に「明誠堂作風俗通、而辯疫病本田」とあるによりて、本書を喜三二の作とし、春町は單に挿畫と版下とを物したるなりとの說もあり。今遽に決定し難し。何れにもせよ、前後二册ともに同一作者の筆に成れることは疑ひなきが如し。

春町は通稱倉橋壽平と云ひて駿州小島の藩士なりき。喜三二は通稱平澤平角と云ひて秋田の藩士にして留守居役なりき。當時の留守居役は、一藩の外交官にして上中下の交際に鞅掌し、殊に狹斜の巷に出入すること多かりしかば、此類の著作の材料には富みたり。穿ちの輕妙なるより推せば作者を喜三二とするも當らずとせず。

本書の特色は主として、例の浮世草子によりて知られたる、元祿寶永年間の上方趣味が約百年を隔て、明和安永の江戸に再現したるを髣髴せしめたる點に在り。衣服調度の流行の、元祿と明和と、大坂と江戸とにては、如何に相似て相異なるかを、浮世草子の挿畫と此二書のそれとを對照して穿鑿するは、頗る興味あることなり。要するに、浮世草子も此種の洒落本も江戸時代の町家生活を具

體示するものとして價値ありとす。

前篇は安田松廼舍氏の藏本を底本とし、永田有翠氏の藏本を以て表紙と題簽とを補ひたり。後篇も亦松廼舍本を底本とし、河竹繁俊氏の藏本を以て表紙の飛白摸樣を製し、尙題簽をも補ひたり。又後篇の原本は、其形前篇よりは稍小形なれども、複製本は藏書家の便宜を慮りて、わざと兩者同形に仕立てたり。

人遠茶懸物

一冊

本書は天明六年の刊行にして、江戸書林仙鶴堂板なり。著者は芝甘交と云ひ、芝全交の門人にして俗稱を大伴寬十郎と云へり。此書と同時に黃表紙「馬鹿等推道中双六」を著し、翌年更に「大々太平記」を出せり。

本書の標題は「人を茶かす」に通はしたる洒落にして、全卷を書畫帖に擬し、天明狂歌の權威たりし人々の筆蹟を摸し、畫は耳鳥齋以上に出で、無目無鼻に描きたるが其味噌らしく、序文中にも鼻尖を見せたり。要するに耳鳥齋の筆意を蒟蒻本に轉用せしに外ならず。只素早く流行物を適用したる手際を賞すべく、火事早き江戸ッ兒の仕事たるを失はず。

二張の裏より三張の表にかけて、や、猥雜の嫌ひある畫面ありしを、複製本には削除して張附を「二ノ三」と改めたり。（原本永田有翠氏藏）

吉原大雜書

一冊

本書は延寶三年の刊行にして、著者未詳なり。形式は「三世相大雜書」に倣ひて新吉原の太夫、格子百三十三人の評判記を書きたるものなるが、賣文者流の手に成れるものにあらず、所謂當時の「お町知り」が「通」を誇りて、樂屋落ちをさへ交へたる得意の作なり。

蓋し延寶度は萬治寬文の盛時も過ぎて、妓風漸く轉化せんとせし際にて、六法好きの奴女郎と意氣地も張りもなき散茶女郎とは相對峙して色を競へり。當時の新吉原には太夫、格子、散茶、はし、けんどんの五級ありしが、是より先寬文五年風呂屋女を廓内に收容してより散茶女郎なる者起り、其勢力侮るべからざるものあり。殊に寬文以後は大名旗本の嫖客衰へ、吉原は町人の世界たらんとしたりしかば、散茶の妓風愈〻煽揚せられたり。乃ち散茶は夜の嫖客を宗とし、太夫、格子は晝の遊興を主とせり。

散茶のみの評判を記せしものも、此書と同年に「山茶やぶれ笠」といふが出で、九年に「吉原山茶三幅一對」出でたり。妓風に二樣ありしと共に、評判記の作者にも太夫派と散茶派とありたるが如し。

本書は賣文者流の作にあらざるが故に、眞面目に品隲し、遠慮なき褒貶をなせるは快し。評判の百三十三人に限るも、數多き妓流より出色の者を選擇せるが知られ、就中罵評を加ふるに便利なるを

採りし形跡あるも特徴とすべし。作者は單に「お町知り」たるに止まらず、「穿ち」にもまた妙を得たり。三浦の小紫の條に「きけば此君にももはやあしきいきむしつきて、ふかきおもはくと出らるゝ事、せかいにかくれなし」と云へる、此後五年目に鈴ケ森に刑死したる平井權八の事も思ひ合されて、目黒の比翼塚の考證を懲懲し、新町の清原が初音と六法ぶりの喧嘩は「讃嘲記」の吉田が放屁の話よりも滑稽なり。作者は更に大に素破抜きて遊女をも嫖客をも驚かさん心ありて、「吉原しづめ石」の續刊を豫告せり。其書は種彦も未見といひたれば、果して刊行せられしや否やは知らざれども、沈め石なれば復び浮ばれぬ程の評を加へたるものなるを察すべし。

原本擦れ損じて第一張の表裏に讀み難き箇所あり。さるは寧ろ除くべきなれど、某氏の推讀によれば凡そ左の如し。

一張表九行、に。　同裏　一行、な親
同　十行、て。　同　二行、さても
同　十一行、見。　同　三行、この
同　十二行、馬。　同　四行、逢。
同　十三行、ぎく。　同　五行、にしへ。
同　十四行、とも。　同　六行、きや。
同　七行、うた。

本書の中に散見する類書を「此吉原書籍目錄」に據りて考ふれば、「くらべ物」は「吉原くらべ物」にて寛文中の印本也。「さんてうき」は「吉原讃嘲記時の太鼓」にて寛文七年の刊本也。「十二時」は目錄に漏れたり。「丸はだか」は「吉原丸裸」にて板行の年代を缺く。「吉原黑白」も目錄に無し。

（原本岡本橘仙氏藏）

筑波山戀明書竝名所　一冊

本書は貞享四年の刊行にして、作者片野長次郎と署名したる山本又兵衛板なり。緣起咄を基として筋を立て、巻末に筑波山の名所案内を添へたり。

本書は筑波山に男體、女體の名あるを種として、山神を戀の神となし、其の冒頭に「此山最も戀の骨髓ならん戀語を歎きし利德其例多し」と叙して、妻を得んことを筑波の神に祈る種々の緣起咄「利生記」四章、卽ち常磐の左衛門、小山の孫太郎、絹川の式部輔、常陸の金石丸の話を小說體に綴り成したり。いづれも祭文、說經の調子、形跡を殘留したる趣ありて、「緣起物」が「小說」に進化し行く徑路を示すものといふべし。

大體より云はんに、緣起物の進化せし場合、卽ち神佛の緣起を述ぶるを主とせし祭文、說經等の一轉して利生記に變化せしまでには、其間に聊か混雜せる體形を生じ、所謂假名草子と浮世草子との混血兒の如きものを形成せり。本書の如きは其刊行年月より推せば、既に其雜種期を過ぎたるもの

なれど、其内容より觀察すれば、猶其特色、具へしものとも謂はる。筑波山の名所々々を列擧するには、和歌を以てするが舊慣なるを、俳句を以てして新樣を見せるも亦其間の消息を語るもの、如し。次に好色本との關係も認めらる。此書中に「長生不死」云々といへるは、單に長命其物を望むにあらずして、性の享樂の長からんことを目的とせる、是れ彼の好色哲學とも謂ふべきもの、本領なりとす。山來好色本は野郎、遊女の評判記の發達せるものにして、其初期には小話をあつめて一編とし何等一貫したる筋の物にもあらざりしが、後に一轉して浮世草子を產出するに至りしなり。本書の如きも、第一の常磐の左衛門は淨瑠璃の「柏木左衛門」の轉化なるべく、第二の小山の孫太郎は不明、第三の式部輔はお伽草子、永閑の淨瑠璃「梵天國」又謠曲の「羽衣」の轉化なるべく、第四の金石丸は「俊德丸」より來りしならん。斯くの如く淨瑠璃、お伽草子、祭文、說經等よりつぎはぎ的に趣向を集めたるものなれども、皆其時代卽ち貞享頃の事に引直して、挿畫の如きも當代の風俗に描きたり。こは固より小說として世に出したるものにはあらざれども、後の浮世草子の作意と同轍と云ひ得べく、且つ其進化の徑路を示すものと謂ふべし。

「案內記」ともあるべき此等が「戀明書」といふ變妙なる名稱を負ひしは珍らし。隨つて小說、浮世草子に屬するものともいひ得べく、或は緩り方の一風異なりたる浮世草子とも云ひ得べし。要するに尋常の案內記たるに止まらずして、面白く讀ましむる爲に之を小說化したるものと評すべし。

本書の原本は、表紙改裝せられ題簽散逸し居たるを、今假に之を補ひたり。（原本長原止水氏藏）

餘景作り庭の圖

一册

本書は延寶八年刊行、菱川師宣畫、小傳馬町三丁目柏屋與市開版、上卷十二張、下卷十張より成れる大本にして、鼇頭に說明を施せる作庭の繪本なり。

作り庭の事の我史上に見えたるは、「紀」の推古帝三十五年五月馬子のことを記し、條に「庭中小池を開き、小島を池中に興す。時人島大臣と云ふ」と云ふが始めならん歟。「家屋雜考」に「庭、寢殿の前東西の廊の廻する內を庭とす、小庭と云ひ又中庭と呼ぶも是れなり。其外假山を築き池水を廻らし橋をかけ往來す。是等をすべて南庭とも又廣庭ともいふ。主人の分際によりて廣狹さまざまなれど、その造りは奈良の朝より大抵相同じ云々」とあり。「園藝考」竝に「美術年契」に據れば、作庭法は平安朝乃至藤原氏の盛時に到るまでは一定したる法式も無かりしが如し。室町時代となりて漸く一種の定型成りたり。浮屠者流の唱へし立石法を傳ふるものあり、夢窓國師の禪味に基く閑雅靜寂を主とするものあり、一轉して寬文以來黃檗派の寺院數〻建築せられてより唐めきたる庭園の新しき形式を出すもあり、既に是より先天然の風趣を摸する路次式を宗とするものも生じ、「類柑子」に「奇を盡されたる分限の殿作りのうち表はいらかにし茅にし、遠石兩士の物數寄をふるはせたまふ」とありて、此圖樣の貞享元祿度の大模樣に影響せるは注意すべき點なり。元祿頃には遠州流、石州流一般に流行したるが、時世の要求は遠石にもあき、それ以上の新しきものを選ぶ傾向あるを以て、

この「餘景作り庭の圖」は出たるにあらずやとも思はる。但し本書のは、序文にも「凡そ此庭に圖する所は、唐の大和のあそこやこゝの面白き景を見立、自然と作意を以て作り成す庭あり、古方の掟とは各別相違すといへども、是は枯山に花を咲せ、木蔭に鳥を招き、「花段に蟲の寄る云々」とありて、むしろ餘景に重きを置き、窮屈なる定型を超脱したる菱川一流の創造と見るべきものなり。構圖頗る豐かにして、唐樣もあれば、和式もあり、山水の奇あり、原野の妙あり、其基く所は、縉紳家の山莊、大名の下屋敷、富豪者の別業等にありしならんか。

本書に三版あり、此延寶版を以て最古とす。次を元祿版と稱し、一題簽も「菱川築山庭づくし」と改め、奥書も「元祿四年五月吉日、日本畫師菱川吉兵衛師宣、大傳馬三丁目鱗形屋開板」と記し、上卷十二張より下卷一張に亙るもの、下卷二張より三張に亙るもの、同四張より五張に亙るもの、三葉を缺きたり。又圖樣は延寶版と異らざれども、往々上下の枠線に二分前後の縮みあり、左右の幅にも約一分の縮みあると、圖中所々に横線を劃し、下卷二張表の人物の衣裳模樣を變じたり、猶柱の文字「上下」を「山」と改めありき。世上往々此元祿版を以て菱川師宣最後の畫蹟と定めんとするものあれど、蓋し延寶版あるを知らざるより出づるならん。師宣研究者の一顧すべきものなり。第三版、東京帝國大學圖書館に藏せらるゝ者に至りては、延寶及び元祿の二版に異なる點は、卷中の人物を殘らず省けるにあり、猶上卷三張芝庭の芝も彫省きの仕方際立ちて調和を缺き、全卷の畫面物足らざる點多し。枠線の縮み、三張の不足、柱文字の改竄、上下の別を去りたる點より推斷すれば、元

祿版の人物を削り去り、其爲に生じたる線の缺陷は入木を以て補ひたるものの如く、奥書も出版年月及び板元を删り、日本畫師の「日本」を除き單に「畫師菱川吉兵衛師宣」と爲せり。又聞く所によれば京都府立圖書館の藏本も東大圖書館本と同版のものなりと云ふ。

本書の改版は再三に及び、延寶版の如きは稀書中の稀書に屬せり。此複製は彫刻、刷揚、製本共に特に注意を拂ひたれど、唯だ遺憾とするは表紙の改裝、題簽の散逸なりしも、表紙は當代多く用ひられし紺表紙を選び、題簽は木村助次郎氏の好意に依り別本を以て之を補ひたり。

延寶版と第三版本との差異を對照する便宜の爲に、今第三版本上卷五張の裏頁を玻璃版に印刷して複製本に添へたり。（原本小山曉杜氏藏）

自筆本之部

一冊

陪駕日記附竹田手簡

「陪駕日記」は文政三年四月、田能村竹田が豐後岡藩の老侯に扈從して、藩地へ下りし時の歌日記の自筆稿本なり。

全卷假名交りにて、卯月廿一日江戸芝の邸を發足したる時を初として、高輪、品川、川崎と進むにつれて、隨所に隨詠し皐月廿二日歸國したるまで卅餘日間の感想を國風九十二首にあらはし卷末に孝憲と署し、例の子持筋の楕圓形中に竹田と刻したる印章を捺したり。

竹田の傳を閲するに、名は孝憲、字は君彝、俗稱を行藏と呼び、雪月畫堂、補雪廬の別號あり。豐後岡の人にして、其家職は藩醫たりき。竹田が篤學は夙に藩侯の認むる所となり、二十三歳にして特命せられて儒員となり、東都に遊學せり。畫を谷文晁に學びしも此際なりき。唐橋世濟「豐後地理志」を選し、脱稿に至らずして死せしや、竹田は藩命により、伊藤寛叔と共に其完成に與れり。又藩政にも參して功績ありしが、文化十年多病の故に三十七歳の時に致仕したれども、そは單に馬廻役を免ぜられし迄にして、藩學に對する關係は寧ろ重大となりたるが如し。然れども致仕後は四方に遊寓し、天保六年八月五十九歳にて大阪に歿しぬ。本書は象松廬門の「竹田略年譜」中文政二年

の條にも「藩老侯の駕に陪して江府へ赴く」、その翌三年「春又駕に陪して歸藩す」とありて、彼が四十四歳の時の歌記日なり。

附錄したる書簡は、竹田が其息太一の許へ長崎の旅先より送り越し、ものにて、粗末なる鼠半切に走書きしたるものなれど、保存の便を圖りてわざと數葉に區切りて冊子風に綴ぢたり。

その日附は單に九月廿二日とあるのみにて、年號を記さゞれども、「竹田略年譜」に據れば、竹田の始めて長崎に遊びたるは文化二年にして、未だ獨身中なれば子息のあるべき謂れなし。再遊は文政九年にして年譜にも「夏、京に入り、秋尾の道馬關に遊び、遂に長崎に到る、野口鎌之輔從遊す、冬、家に歸る、五十。」とあり。されば此書簡は「陪駕日記」より七年後の文政九年九月廿二日に認めしものならん。竹田が長崎に於ける感想を覗ふに足り、又彼が晩年の繪畫等に現れし趣味をも察し得。唐通事に就きて支那語の研究をも爲したるにや、「近所に老先生も御座候此に參り候筈云々」と見えたり。當時唐通事(卽ち支那語譯者)は大通事、小通事、小通事並、小通事末席の四階級に分れて都合四十人ありき。又「拙抔は生質の唐好き故、朋友中往來仕候處何れも唐山樣の屋宇器物、先づ一すと唐に渡りし心地なり」とあり。支那趣味が明治初年の西洋のそれ以上に珍重せられし樣を想見すべし。

「日記」は海軍大佐故溝部洋六氏の愛藏品なりしを、會員長谷川天溪氏を介して中佐の生前に借用して複製し、「書簡」は同人市島春城氏の所藏なり。二書共に竹田の性行を知る好資料なり。

(原本故溝部洋六氏藏)

游相日記

一冊

本書は渡邊華山が天保二年九月二十日に江戸を發して相州厚木町に赴き、其附近を逍遙せし際の畫入日記なり。同處には故舊あり、そを尋ぬるが起志なりしなるべけれど、又風景の勝れたるを聞きて、觀賞をも兼ねたる旅行なりしなり。されば其發足に當りて胡粉、朱砂等を準備し到處揮毫に便ぜしなるべし。

行旅匆々の間に達筆にて記し、ものゆゑ、讀み分け難き箇所尠からざれども、小蘭村に一農家を尋ね、もと自分の乳母たりし村媼と語るあたり不用意に書流されたる中に、懷舊の情自から紙外に溢れ、華山の面目躍如たり。又寫生畫は輕妙にして氣韻高く、洒落にして雅趣奔逸せるが、殊に俠客彦八の像の如きは、其剛愎頑強の狀を推想せしむるものあり。

原本は全部薄葉紙を用ひ、畫には淡彩を施したるものもあり、且つ文中ところ〴〵に朱にて加筆したり。玻璃版面にはそれらが總て黑色に映出せることを聊か遺憾とす。又複製本に文字の消えたる所あるは、原本の蟲ばみたる痕なり。

渡邊華山は田原藩士にして名は定靜、字は子安、全樂堂と號す。天保十二年十月十一日自刄す、享年四十九、三州田原の城南城寶寺に葬る。

（原本宮本仲氏藏）

繫升三升繫

一冊

本書の原本は、黃表紙作家たる京傳、三馬等の先輩として最も有名なりし一人、櫻川杜芳の自筆草稿にして、門人慈悲成の畫ける杜芳の肖像竝に其眞筆たることを證明したる一文を卷頭に載せ、且つ文化十三年子春と奥書したる四方歌垣が自筆の跋文を附したり。もと式亭三馬の藏本にして、「文化十二年乙亥秋八月下浣補表裝收藏、式亭主人」の題識あり。

杜芳は岸田豐治郎と稱して、天明頃芝櫻川三島町に住したりし表具師なり。其著は黃表紙を專とせり。「青本年表」に據れば、鳥居清長の畫にて刊行せし「故事附千本花王」其處女作なるが如し。爾來毎年五六册づゝ、北尾政演、又は同政美、又は鳥居清長の畫にて開板し、「天明八年五月に歿しぬ。其墨寬政元年の春歌川豐國の畫にて出版せし「武茶修行押强者」は其最後の作なるべし。按ふに本書も亦著者晩年の戲作にかゝり、遂に上梓せられざりしものならん。作意はこの人一流の甚だ大摑みの嫌ひあれども、そこに亦原始期の黃表紙たる特色を具し、又譯もなく園十郎最眞なる點に、此作者の江戸ッ子氣質見えて面白し。式亭三馬が此稿本の極印を彼れの門人慈悲成に打たせ、跋文を故人の一友四方歌垣に需めしを見ても、深くこの書を愛翫せしを窺知すべし。

慈悲成の杜芳に師事せしは廿一歲の時なれば、卽ち天明八年にして方に彼が歿年に當れり。師弟の緣は薄かりけれども、彼れの衣鉢を繼ぎたりしゆゑに名を成したりと云ふ。

又四方歌垣は杜芳の友人にして、初め戀川春町の門に遊びて戀川好町と稱し、狂名を鹿津部眞顔と云ひ、宿屋飯盛と相竝んで狂歌界の双璧と呼ばれし人なり。此書の跋を書きしは杜芳の歿後廿九年、歌垣六十四歳の時なり。

本書は、文字も繪も杜芳其人の自筆たる點に價値あれば、すべて原本の體裁を其儘精巧なる玻璃版にて複製し、杜芳の肖像は特に木版を併用して其傳彩色をも原書通りに施したり。

（原本小山曉杜氏藏）

諸色買帳 呑込多靈寶緣記

一冊

本書は山東京傳の作にして、享和二年に刊行したる黄表紙の自筆稿本なり。其表紙裏面に筆耕への注文書中「此そうしは靈寶がおもゆへ人物はあしらいの思召云々」とあるにて著作の本旨を見るべし。安永六年三月、兩國廣小路に於て、とんだ靈寶の見世物の興行に滿都の大喝采を博せしより、天明には杢網、東作等の狂歌仲間に寶合せの催しあり。爾來牽强附會して笑を取ること止まず、最後に口上茶番に依りて幕末の通人界を賑したるもの、實に同一系統なり。斯くの如く催笑の遊戯八九十年に亙りて盛なりしが故に、此種の小說雜著も甚だ多く、中にも才人京傳は其得意の技を此方面に揮ひ、豐富なる機智を隨處に表現せり。其標本は「百人一首初衣抄」、「紺名小紋帳」等に見るべし。本書の題名に「呑込多」の三字を冠したるは、當時「呑込」といふ詞の流行し、諸事に就きて了解の敏きこ

とを示すに用ゐられしより、該流行語を假用したるにてあるべし。京傳用語の輕快すべて此類なり。這次「呑込多靈寶緣記」の自筆稿本を把りて、仔細に京傳が挿畫その他につきての注意書きを讀み、然る後本書の刊本に對するときは、具に此才人の天分を知り得るのみならず、別樣なる領解をも言外に得らるべし。

（原本松廼舍文庫藏）

腹之内戯作種本草稿

一冊

本書は式亭三馬の作、文化八年所刊合卷の草稿にして、全部その自筆なり。半紙二ッ切の堅綴にて三卷、表紙を合せて十九張より成れり。

上卷、表紙の中央に大きく「式亭三馬腹之内」と書し、其左傍に「上册鶴亭板」の五文字を置きたるが更に其上へ貼紙して「腹之内戯作種本」と大書し、尙右傍に「文化」と稍大きく記し、其下に「七庚午年正月脫稿、八辛未年正月發兌」と分註せり。中卷、表紙中央には「式亭三馬腹之内」と書し、左傍下部に「つるや板」と書添へ、下卷、表紙の中央には同じく標題を書き、右傍に「三馬作、美丸畫」と記し、左傍に「つる喜梓」と書きたり。依りて思ふに「腹之内戯作種本」と云ふ標題は再考の上の命名なるべくや。又脫稿を七年正月と書したるも、下卷の裏表紙に「午の九月朔日」といふ日附あるより察すれば、恐らくは九月朔日に擱筆したるならん歟。此稿本は三馬が三十五歳の時の作なり。

内容は作者一流の輕妙なる筆にて、彼れ自身の戯作振の樂屋を赤裸々に寫すに擬して、其實は當時

の作家及び畫家の内幕を曝露したるもの、例の皮肉なる穿ちなり。巻中三馬の門弟たる岡山鳥、益亭三友、徳亭三孝等が歌妓を聘して酒を飲む圖ありて、其書入れに「京橋(京傳)は元よりおとなし、槇町(初代豐國)は酒をやめる、本所(國貞)は眞面目なり、まだしも頼みとする生醉は神田丹前の色男(岡山鳥)だ」とあるなども、作家、畫家の内幕の一面を漏したるものにて、當時の軟文學者の面影を知るに足る。岡山鳥(後に三鳥)は旗本近藤金之丞の家士にて、通稱岡島芳右衛門、丹前舍と號し、初め馬琴の門人なりしが後三馬の門に遊ぶ。又三友は呉竹園と號し藥種商の弟なり。三孝は狂歌師にて桃の種成と號し米商なり。

下巻表紙裏に挿畫の趣向を畫工に注文するとて「よし丸公、此繪ならびすべて云々」と「公」扱ひにせる如き、三馬其人の風手躍如たるを見るべし。

本書は文字も下繪も共に三馬の自筆なる點に重きを置き。一點一畫も原形を忽せにせず。流布の版本と比較せば興味自から湧起すべし。

(厚本松廼舍文庫藏)

修紫田舍源氏　一册

本書は柳亭種彦が一世の傑作と許されたるもの、自筆稿本にして、松廼舍文庫藏本廿四編中の首編(第八編)なり。

「田舍源氏」は、文政二年の春に初編を開板し居れば、初めて着筆せしは其前年にして作者五十歳の

時なり。爾來その翌年より二年間は毎年三編づつ、四年目よりは三編或は四編づつを出し、天保十三年に至り、第三十八編限り禁止絶板と成りしまで、十四年間に亙りし長篇の著作なり。慣例として草双紙類の出版は大抵新春に發賣せしなれど、本書の如きは作と畫と相俟ちて時尚に投ぜしかば出版書肆仙鶴堂は其三編以後の奥附に「彫刻延引の分は或は三月或は四月向來は時ならずも賣出し候云々」と記せり。かゝるは合巻物出でゝ以來他に類例なかりしことにて、「田舍源氏」の好評未曾有なりしを證明するものと謂ふべし。

されば「作者部類」の種彦の條にも「文政十二年の春新板田舍源氏といふ合巻册子世評喧しきまでに行はれたり」と云ひ、「又當今の臭双紙の巨擘とせらる、其身に於ても自負甚しと云ふ」と書添へたり。中にも本書第八編の如きは天保四年春の開板なれば、作意も繪組も作者が最高得意時代の案に成れるものなり。即ち其五十四歳の時に相當す。

本書の主人公たる光氏は、通例は、彼の正妻と廿一人の妾とを有して、十八腹に男女五十五人の子を生せし徳川十一代將軍家齊(所謂大御所樣)をモデルとして作られたるものと稱すれども、三田村鳶魚氏の考證に據れば、單に家齊の放縱なる閨門を描きたるのみにはあらで、十代家治、十一代家齊、十二代家慶の三人の事蹟を材料として、必ずしも一人を一人に擬するやうのことをせず、よりて巧に忌諱を避けながら徳川氏大奥の模樣を髣髴せしめたるもの、如し。例へば東山義正が「四國九州に隱れなき大名から富徽(とよし)の前を迎へて妻とし、義尚、光氏其他の男子を儲ける」ことに成り居

れるが、この富徽の前は薩摩侯島津重家の女茂姫に當れり。されど茂姫は寛政元年十七歳にて家齊に歸ぎたるなれば、光氏を家齊には擬し難し。又義正は側室に花桐を入れて次郎光氏を生ましめたり。而して花桐は家齊が側室たりしお樂の方に當るとも見ゆれば、其生子敏次郎（十二代將軍家慶）は光氏に相當すと見るべし。又本篇に主たる稻舟は、田安中納言宗武の女種姫とも思はるれど、若し敏次郎を光氏とすれば、年代合はず、光氏の出生は種姫逝去の翌年なればなり。要するに、「田舍源氏」は、當時盛に風說せられし家齊・家慶の大奥談を何くれとなく取集め、花やかなる趣向の材料となしたるに過ぎざるものなり、卽ち寛政元年より文政十年まで約四十年間の噂話を器用に面白く綴り合せしに外ならず。

種彦は其草稿を作る前常に種々の覺書を備へて案を凝し、徐に筆を執るを例とせり。本書の如きも人物の姿態、衣裳、器物、屋舍、背景等に至るまで細心を費したる跡、此草稿に依りて歷々窺ふを得。畫工國貞も亦よく作者の意を體して、常に作者の下繪組の儘を精寫するに力めたり。板本と草稿本と比較し見れば興更に深し。人物の配置、姿態、衣裳其他の模樣、序文を圍む枠などの末に至るまで、皆下繪と異なる點無し。纔に異なるは此八編中、四郎正尙が仕舞を舞ひ居れる繪組に、光氏の位置が下繪とは反對になり居れるのみ。尙一つ注意すべきは光氏が髭の形にして、下繪には普通の大名髭式に描きたれど、版本に見えたる彼の特色ある前茶筌は國貞が工夫に成れるものにて、作者も喜びて採用せし由、有名の話なり。

只一ッ遺憾なるは、下繪中の朱の書入れを、玻璃板に複製せし爲に原稿と同一の墨刷となさゞるを得ざりしことなり。但し一張及び二張に限り朱字を木版にて刷出して原本の眞面目を髣髴せしめたり。

（原本松廼舍文庫藏）

里見八犬傳 第八輯 卷之一

一册

本書は天保三年二月の序文ある曲亭馬琴の自筆稿本なり。此年は著者齡六十六にして右眼を失ふ前年に當り、疾をつとめて猶筆を止めず、想を練り筆を呵して屈せざりし狀を想見すべし。表紙裏に「本文書畫二十二丁、文政二辛卯年冬十一月廿四日稿了」また「序目書畫八丁、同三年壬辰春二月十三日稿了」とあり。稿了を文政とすれば當年より十四年前の著となれども、饗庭篁村翁の談に據れば「後表紙に天保二年と記すべきを文政二年としたるは翁の書誤りなり」と斷ぜられたり。眞にさもあるべし。著者眼疾中この八犬傳八輯五册の外、「開卷驚奇俠客傳」第二集五卷および小册子四五種の作あり。然れども右眼の痛み强くして往々机に倚り難く、此編の挿畫の一の如き、畫工柳川重信を招きて意を授け下繪を作らしむ。「短刀を閃かして賊婦小文吾を刺んとす」の圖それなり。翌天保四年の秋には右眼終に見えずなりて、殆ど手探りにて原稿を作る。字體大小一樣ならず、墨附濃淡まち〳〵なり。されば此原稿は著者が健康時に於ける最後の稿本とも稱して尊重すべきものなり。昔の作者の原稿を作る、趣向文章のみならず、挿畫より製本體裁、口繪欄取まで自ら工夫したり。先靈山東京

傳はもと畫家より出でたれば、挿圖等の工夫は自由なりしならんも、而も趣向文章に精神を費し、脫稿遲々として出版豫期の如くなる能はず、發行書肆に迷惑を及したること多し。後輩柳亭種彦は人と爲り綿密にして、草稿を作る前に「おぼえ書」をなし、それを辿りて文案を爲せり。しかも兩人は著作少くして一年兩三種に過ぎず。馬琴は大作兩三種の外に小著數十部に及ぶに、其の稿本は俗に云ふ打つけ書にして殆ど成書を寫すが如し。書直し又は貼紙甚だ稀にして、稿本其の儘を直に板下となして支障無きこと此稿本を見ても知るべし。高齢にして此かる細字をものして傍訓まで附し一氣呵成に些の停滯なく筆を走らせたる狀見ゆ。壯年盛時の草稿に至りては「版下まさり」と出版書肆に稱揚せられしも宜なり。此自筆草稿はその盛時と衰時との境界を爲せるものにして、著者が稿本中最も珍重すべきものなり。

本書は早稻田大學圖書館收藏に係る三十八册中の第一册にして、仔細に檢すれば挿繪の下圖に用意周到なる點を見出し得べし。

（原本早稻田大學圖書館藏）

歌舞伎十八番の圖

彩色摺十八枚
外に跋文一枚

本圖の原本は肉筆の粉本十八圖より成り、其中十六圖の筆者及年代は不明なれど、運筆頗る自在にして凡庸の者にあらず。他の二圖は後に淡島椿岳補足し、題して「歌舞伎十八番の圖」と云へり。

市川家の家藝として其十八番と稱するものは、不破、鳴神、不動、象引、助六、暫、外郎賣、矢ノ

根、景清、關羽、七ッ面、毛抜、解脫、蛇柳、鎌髭、押戻、鰹、勸進帳なり。然るに本圖中には關羽なく、蛇柳の如きも多分それならんかと推定せらるゝに過ぎずして、尙疑はしき處あり。而して茶の湯の景清を加へて十六圖となし、助六と不動の二圖を補ひて數を成せり。或はこの圖の本來は十八番など云ふ制限を離れて、單に市川家の當り狂言を列ねたるに過ぎざりしもの歟。或は又筆者の之を描きし當時は、未だ歌舞伎十八番なるものが確定し居らざりしにやとも思はれざるにあらず。「芝居秘傳集」には、對面、石橋、道成寺の類は木戸の呼物十八番とてあり、これを歌舞伎十八番と云へり。又團十郎の十八番は、それを學びたるにて歌舞伎十八番と別なりと云へり。歌舞伎十八番は歌舞伎全體のものなるを、彼れは敢て市川家の十八番を選びて我が物とせり。故に世間にて歌舞伎十八番と市川の十八番と辨別せざるに至るならん歟。又十八番といふ名稱は遠く小野阿通の古舞に由りて起り、十八番と唱ふれども十八種ありしにあらずとも云へり。然れども圖中の勸進帳は、彼の天保十一年に七代目團十郎に依りて初て演ぜられし後の能式の勸進帳なるが如きは如何。豐芥子の「歌舞伎十八番考」の序文を見るに市川家が代表的の狂言を十八番だけ選み、撰物として配布せしは、右の勸進帳興行後なるが如し。されば助六と不動の二圖は何かの故ありて後に補ひしものと假定し、此勸進帳の圖ある以上は天保以後のものかとも思はる。尙明治廿六年五月歌舞伎座にて九代目團十郎が勸進帳を演ぜし際、故幸堂得知氏が「勸進帳芝居興行度數」を擧げしを見るに、市川家十八番の勸進帳は、當時を距ること大約百九十餘年の昔、初代段十郎が自ら脚本を作りて之を興

行し、辨慶を勤めたるが初めの由にて、「(一)元祿十五年二月元祖市川段十郎、(二)二代目、年月詳かならず、(三)七代目海老藏、天保十一年三月河原崎座に於て」と記しあり。同氏猶ほ後の興行年月を列記し、九代目は十六度目なることを考證せられしが、元祖の演ぜし勸進帳、卽ち安宅の辨慶は後のそれとは大いに筋立を異にせしもの、如し。又「十八番考」中には天保八年の繖の角書に、始めて「歌舞伎十八番の內」と銘打ちしもの見ゆれば、歌舞伎十八番といふ名は其頃より好劇者間に言ひ觸らさるゝことゝなりしもの歟。折から天保十一年に海老藏の演ぜし新勸進帳を加へたる市川家の摺物が廣く配布せられしより、彌々其名の喧傳せられしにはあらざる歟。次に、本圖中の勸進帳の辨慶は、其扮裝著しく後のそれに似たり。それこれ此圖の成りしは天保十一年以後にあらずやといふ疑ひなき能はず。然れども鑑賞家の多くは本圖の製作期を安永よりは晩からずとし、其筆者を鳥居派又は勝川派中に物色せんとす。或は又光琳派の畫家の戲作に出しものならんとも云ひ、又某畫伯は本圖の筆意の何となく蝦形蕙齋のそれに似たる所より推して、同人の筆ならんと言はれたり。蕙齋は文政七年に歿したる畫家なれば、それを正しとすれば天保十一年以後といふ推測は成立たざることゝなるなり。尙椿岳の二圖は其嗣淡島寒月氏の證言によれば、其歿年より一年前の筆なりとのことなれば、明治三十一年に當るなり。

參考の爲「歌舞伎十八番考」に據りて各番の初演年月を擧げんに、不破は延寶八年市村座「遊女論」、鳴神は貞享三年中村座「門松四天王」、不動は初度未詳、再度元祿十年中村座「兵根元曾我」、象引は

元祿十四年中村座「傾城王昭君」、助六は正德三年山村座「花形愛護櫻」、暫は正德四年中村座「萬民大福帳」、外郎賣は享保三年森田座「若綠勞曾我」、矢ノ根は享保十四年中村座「扇惠方曾我」景清は同十七年中村座「大銀杏榮曾我」、關羽は元文二年河原崎座「閏月二人景清」、七ツ面は同五年市村座「姿觀隅田川」、毛抜は寬保二年大坂佐渡島座「鳴神上人北山櫻」、解脫は寶曆十年市村座「鐘入解脫衣」蛇柳は同十三年中村座「夏柳鳥玉川」、鐵は天保八年市村座「花雲鐘入月」、勸進帳は同十一年河原崎座「勸進帳」、鎌髭と押戻は年代未詳とあり。

本書外題の文字は九代目市川團十郎なるべし。原本はもと談洲樓燕枝の手にありしが、今は松廼舍文庫の所藏に歸せり。本圖の複製には最善を盡し原畫の雅趣を些も減殺せざらんことに努めたり。

(原本松廼舍文庫藏)

武江扁額集　一冊

本書の原本は齊藤月岑の自筆にして、江戸市中の神社佛閣に奉納せられたる著名の扁額を模寫し、「松濤雜纂」第二卷に「武江扁額縮圖」と小題して收めたるものなり。今假に「武江扁額集」と改題して刊行す。

本書を編し終りたる文久二年冬の自序に據れば、扁額を集めたる繪本は、元祿の頃に「額の評判」あり、安政の頃には、京都の畫匠北川春成、合川珉和の「扁額軌範」あり、又春成作圖、速水春曉

齋解說の同續篇あり、藤彦の「嚴島扁額縮本」ありて世に行はれしより思ひ附き、江戸市中の神社寺院等に在る名譽の扁額を探り其縮圖を作りたるものの如し。卷中收むる所の縮圖は、月岑が四十九歲の春より秋にかけての、嘉永五年の臨摹に成るもの最多數を占むるを見れば、此事業に着手して努力せしは、多分該五年よりなるべし。但し其以前の作圖あるは同著者が「江戸名所圖會」の完成に腐心し居りし文政三年より天保七年の間、未だ扁額圖蒐集の意志の深く存せざりし頃、大著述の餘業として偶然模寫し置きたるものならん歟。元來江戸には古き扁額乏しく、寛永十九年の年號ある淺草觀世音堂内の繪馬を最古とし、其他偶今に保存せらるゝものあれど、二百年以上に出づるは無く、剩へ天災又は雨露の害に遭ひて破損し、殆ど遺存するも稀なれば、全卷五十枚を選集し得たる苦心思ひ遣るべし。

松濤軒は、もと先代長秋の號なるが、月岑之を襲ひて雜纂に其號を冠せしめたるらし。此「松濤軒雜纂」といふ自筆本は未定稿にして、六卷より成れども、一卷より四卷に至る四册は松廼舍文庫に五卷、六卷の二册は東京帝國大學附屬圖書館に分藏せられあり。其内容は四卷までは挿圖を主とし五、六の二卷は記事を主とせり。

本書複製には精巧なるコロタイプを用ひ、題簽は雜纂の題名武江扁額縮圖中の四字、猶雜纂中にある「集」の一字を假用したり。（原本松廼舍文庫藏）

稀書解說 終

稀書複製會趣旨

近年複刻の益んなるや、古文學の鉛印縮册せらるゝもの日に相接ぎ、古典の涉獵は復た蠹魚堆裡を探尋するの要なく、讀書家の欲求殆ど充たされざるは無きが如し。

然るに讀書の要諦は先づ書籍の背景に親しみ、著述當時の氣分に浸つて以て同感味を深くするに在るが故に、單に理解を旨として氣分を必要とせざる算數、科學、律令、稼穡等の書を除いては、裝潢版式は讀書家に取りての重大要件也。就中、傳奇、院本、詞曲若しくは風俗に關する古文獻は、複印に由て文字を通讀するだけにては其眞味に透徹する能はず。例へば西鶴又は近松の如きは、如何なる複刻にても物語の筋を追ひ文字の美しきを賞づるに足るが如けれども、古板の簡朴なる刻字の一行一行を追ひ、時代の古色ある紙の一枚一枚を披く間に生ずる氣分や情味が如何に深く文字の奥に浸徹し作者の心肝に突入するに力あるや知る可からず。這次讀書の興快は古典を身讀する爲めの緊要事にして、沙翁フォリオ版が世に推重せられて研究の基礎とせらるる所以畢竟亦之に外ならず

今日行はるる活版洋裝の複刻本にて古文獻を味ふ事の難きは、恰も洋服テーブルの淨瑠璃が聽者の興を牽起し得ずして却て興味を索然たらしむると等しからんのみ。讀書の三昧に入る者は先づ其のアナクロニズムに顰蹙苦笑するを禁ずる能はざる也。

併し乍ら西鶴や近松は、縱令其の眞の情味に融會する能はざるも、猶ほ其價値の幾分を複本に由り

て味ふを得べきが、古文獻中には內容の文章と外裝の形式と相待つて、書籍全體が當時の文化を代表するものあり。例へば繪入淨瑠璃本、狂言本、赤本、黑本等の如きは書籍其物が當時の完成したる民間文學にして、書籍の形式を離れたる正味の文字は完全の生命あるものに非ず。之を普通の活字本に改むるが如きは全く複刻者の沒理解也。

或は又未刊の稿本の如き、普通の寫本ならば活版本にても可なれども、自筆の稿本ならば其筆痕を其儘に影寫して傳へたきが愛書家の自然の欲求なり。且未刊の稿本の多くは未定稿或は人に示すを豫期せざりし筐底の手控又は日記の類なるが故に、中には較や完成せられたるものあれども、中には殆ど體を爲さざるものもあり、或は記事の連續を缺き或は半途に斷絕し、甚だしきは支離滅裂なるものも少からず。是等は一部の成書としては極めて不完全なれども、若し著者自筆の儘を傳ふる時は其筆蹟が巧みなれば巧みなるだけ、拙ければ拙きだけ、何れにしても著者を偲ぶに足るべく、大小瘦肥濃墨淡墨一樣ならざる所に著者の面目を見るべく、一點一畫の塗竄も、無意義の符號も將又空白と雖も一々著者を想見するの料ならざるはなし。況んや著者の苦辛の痕を留むる名著の草稿又は筆者の風貌を彷彿するに足る畫日記の類に於てをや。是等は尋常複刻の敢て企て得る所に非ざるなり。

夫故に複刻は日に益々盛んなるが如けれども讀書家及び好書家の饑渴は實は醫せられず、或は又原本を坊間肆頭に漁らんとするも、近時古板稀本は日に月に乏しくして恰も大海の遺珠を拾はんとす

るに等しく、隨つて其價も愈々貴く、甚だしきは古美術品と相競ふの高價を稱するものを生じ、勢ひ此等の稀覯書は漸く眞摯なる研究者の手を離れて骫物家の庫中に入り、鑑ては蠹魚の饗餐に委せらるるに至るも計られず。其價の貴きは猶ほ忍ぶべけれど、其存在の次第に讀書家圈內を去らんとするに至りては、我等は古文獻研究の爲め風馬牛なる能はず。今にして之を原本の儘複製し置くに非ざれば終に其片影をだも窺ふ能はざるに至らんも測り難し。

玆に於て乎、我等同好者は讀書家の止み難き欲求として本會を起し、稀覯の古本、未刊の自筆稿本等を、總て原本通りに複製して以て他日の亡佚に備ふる所あらんとす。我等の期する所は古文獻研究の稗補に在りて、敢て自己の好事心を滿足せしむる爲めに在らず。願くは大方同好の諸君、我等の事業を以て動もすれば讀書家の爲に却て渴を鴆毒に醫するの禍をなす世間滔々の覆刻と同一視する莫からん事を希望す。

複製の方針

一、本會は古版、名家の自筆稿本及び名著の草稿等の複製を目的とし、全部を木版又は玻璃木版とし、純良なる生漉の日本紙に印刷して以て原本を彷彿せしめんとす。

一、本會の複製は啻に內部の本文版式のみならず、外部の裝幀の如きも悉て原本の儘に倣ふが故に表紙、外題紙等は必ずしも一定せず。其の大きさも亦大小縱橫定まらず。

一、本會の複製は主として德川初期より元祿前後に至る古版中の傳來最も稀罕なるものを選び、自筆稿本及び名著草稿は專ら文藝に屬するものを採る。元祿以後德川末期のものと雖も當時の文化及び風俗の研究を補ひ、且好書家の興味を充たすに足るものは之を採擇す。

一、本會の複製は右の如く內容に版式に代表的にして傳來最も稀なるものを擇ぶと雖も、同時に成るべく多趣多樣の稀書を收めて古版の目耕を豐かにするが文獻學上及び書史學上の興味なるを信じ、且印刷上にも同一書籍を數回に頒つよりは一時に全部を刊出するが印刷上の良果多きが故に、月次の刊行としては紙數の餘り多からざる册子を主とし、殊に最も亡佚し易き零册小著を先きにし、成るべく多種の稀本を多く包羅せん事を期す。大部の稀書は別に本會の事業として複製する事あらん。

一、本會は從來會て複刻又は複製せられたるものを勉めて避くると雖も、著名の稀書にして餘りに粗笨なる複刻又は複製の爲め殆ど原本の面影を失ひたるもの數四にして止まらざれば、本會は是等著名の稀書に限りて多數の希望に由て更めて複製する事あらん。

大正七年六月

移書複製會

同人

市島謙吉

附錄

終

和田萬吉

坪內雄藏

內田貢

安田善之助

主事山田清作

15
394

大正九年六月二十日印刷
大正九年六月三十日發行

不許複製

編輯兼發行者　東京市牛込區富久町八十四番地　山田清作
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　本間十三郎
印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社
發行所　東京市牛込區富久町八十四番地　米山堂
電話番町三四六一
振替東京三三五〇九

15
394

終